風俗文選犬註解

序
列傳

へ 5
4502
1

門 へ 5
號 4502
巻 1

五老井許六遺稿
葎甘仏我述著

風俗文選犬註解

全部十巻
前編五巻

佐保蔵書

昭和十年
七月六日
購求

五老井許六先生著

風俗文選犬註解巻之壹

江都　葎雪庵午心門人
　　　葎甘仏我著

風俗文選序

月澤律師李由述

亀城の羽官子五老井の許六滑稽俳諧新古乃文章を拾ひ集めて風俗文選と題す むかしやまとの文をあつめて是を本朝文粋といへり 我おもふに此文粋は 本朝の人の述作にて文の作まつたく漢文なる事 今許六か文選は和字乃文章にて其作をのつから漢文にかはれり むかしよりやまと詞おかしきを旨くみ此物かたりのあひのことく本朝の文章と称すへきものは今此風俗文選のみなるへし 夫漢文は文字乃数を定め韻をふみて其格きまれるゆへ これを文章とて文選と古文とに記する處を作れ遠あれハ漢文とては徒らに…ま

してわ文なき文字の数さだまりは韻字とてなるし来るを去来か風賦に
五音相通の仮名をもて韻とハ是和文に韻をふめる一格なりあながち韻を
用ゆるにもあらずもはら自由なるべし向後体をまつはるに其題の趣に
よりて其体を定むるを学者心得べし

江東ノ僧 律師 李由字買年於四梅廬序

風俗文選此題号和漢に対して名つけゝり風俗をみくにぶりとよむ
本朝といふの国し文選ハ梁昭明太子のあつめる文選の題号に模し
てかりもひいふの文章に和漢対揚すべきことはりをもて風俗文
選と題号を冠しめぐり
序にはしがきとよむ来のいとにあるか初くるものはしめをかき起すなり
亀城ハ金亀山彦根寺の地にして今井伊家の御城則彦根の城なり
李由許六と相して此文選をあつめる実ハ李由のあつめしさぬ
集中断絃の文ありて二叟のよみ添へし風流をえらむ此集
めるも時もともちろんを用ひし助け補ひしことなり
滑稽にあり酒盞の名して酒をつぎて絶さぬといふ心なり

本朝文粋ハ藤原明衡か作りて日本の歴々の詩文をあつめて十四巻とな
やまと詞 今えらす人の目にふれすみる上代の歌をも有らずる此道の本意なり
文章一貫ニ云 文心ニ云 有二類句一用二一類字一所三以壮二文勢一広二文義一也
設ㇾ情有ㇾ宅置ㇾ言有ㇾ位宅ㇾ情曰ㇾ章位ㇾ言曰ㇾ句故章明也句者局也
也夫人之立ㇾ言因ㇾ字而生ㇾ句積ㇾ句成ㇾ章積ㇾ章成ㇾ篇也
断処曰ㇾ章 言ノ断処ヲ句ト云
毛詩正義ニ云 聯ㇾ字分ㇾ疆所ㇾ以ㇾ局ㇾ言句也

風俗文選序

落柿舎去来

世に俳諧の文ありて其集といふもののいまだ見ず先師一とひおもひ立のうる
侍れと心にかなふもの希なればむなしくやみぬ今十とせ余あとせまりん今や
つ家の誰かれ風雅に股ふまつて管城に翮を握く文場に臂をふるふ
者すくなからず今此文章に斧を入て始に叢の辞あり終に頌讃の風流をつく
す或は書あり或は論ありて記賦のまことを述文誄の哀を残す自撰類の

支ありて許多の作をなされすこれを千歳の後に施してたいらの文章の名利と
せハ彼童子の師たる讀を教ふる類なるむや此文を志ける者ハ此道を志る
者なり作者ハつねに五老先生と称するもの湖東森氏なりして虚實に
ふる人ハゝし志りハ今の名望を感じて此文選を益すべきもの

宝永元秋日序

此序文ハ去来没するすこし前の作なり同年九月ハ去来没し
たりされハ先師とあるハ芭蕉翁のことにて文選をあつめる宝永よ
りハ十年前に遷化ありしなり先師自選の集なりし

去来抄　山石舅やまさきもひとり乃名　去来

此なハ翁を隔てゝ笈小文に書入〳〵しとなり去来曰笈の小文集ハ
先師自選の集なり名をきゝていまだ其書を見ず草稿も中ハにして遷
化ありしなり此時ハ撰ひ給ひし句の此集の入得るやと伺ふ先
師曰我つくる笈の小文集に入句二句持てるもの稀なるべし此旨の
ことをつかるの作となす

管城ハ筆の名なり今やつかふの誰彼此集をほきしるく先師の
をしえ今に傳はり文藻の盛りに行はるゝを深くり
筆誌のちなみに云
百川學海甲集上學齋先生佔筆に云
傳記小説実を失ふる事ゝ多し只る事始に蒙恬筆を造り蔡倫紙を造
られき皆以すきうはと蒙恬ハ秦の時の人詩の中に已に彤管あり謂く女
史よのする所の筆又いるく史ハ筆を載る又孔子春秋を作る筆すへき
は則筆し削るへきハ則けつる筆を獲麟に絶す又尚書中候に玄亀負
圖周公筆をとらけてもちて時の文を写す説文に秦に謂之筆楚に謂之律
呉に謂之不聿燕に謂之弗其来る事尚し馬犬羊乃ち附會してもちて管牘乃
筆とハ則ち今の弗筆也毫にあらハ蒙恬によりて始て兎毫を用る
のと蒞玄筆を紙り墨を和するの句あり則毫をと以て墨を染るの所
ならけし弗筆豈始める所んや此なハ秦の前にあり筆を蒙恬ハ
造り始さるをまむ況や崔豹か古今の注に蒙恬之筆造る枯木をもちて管に
として鹿毛を柱として羊毛を被とすと亦兎毛弗管を始さる時ハ則又豈
[illegible]

兎毫紫栢に起るといふ危りんや此論説文に秦ヶ筆といふ一句あるをもて
以て後世にあやまてる之又蔡倫か如き則後漢の時の人なり去りとも
其の外戚傳に云赫蹏といふ則小紙也則紙の字なり恐らくハ亦蔡倫
かはじめし所にあらん紫栢か造る所ハ世より精工なるをいふにてあらん
紙筆共に二人にはじまるといへるハ則不可なり
紙も後世に製り古ハ竹を切簡の如く割り刀にて刻り牛の草を用
てあらはすより古書を簡篇となつけたり
或操レ觚以樂爾　或含レ毫而邈然　觚ハ木之古人用レ之為レ筆
彼童子の句讀の師　　韓愈師ノ説
彼童子之師授レ之書而習ニ其句讀一者非下吾所謂傳ニ其道一解ニ
其ノ惑一者上也
讀書の法ハ先素讀をならはすして句讀明らかならされハ文義通しかたし
句とつとハ句きりの語の絶る所を句といふ語絶されハ文の屬きあれ
長きあらハ其中のきりてつゞきあるをいふとよむを讀といふ　唐
の人ハ此句讀ふ付て文義を解する処に句讀を受く句讀を授ト

いふ文章の義理句讀によりてかはる処に句讀を緊要とするなり
吾国の人も倭語を用ひて亦袁彼に義理をとる故句讀をそろへ
されハ大略其義に通する事を得るなり

風俗文選序　　東䒾坊支考

むかし文選あり時ハ吾朝に文選あらんやとこゝしきろひて何そふすれそ
湖東の武子許羽なり凡文章ハ周孔の心を傳へ荘孟の筆に轂舞せし
けて和漢に心をつらねとも姿を傳ふるものハ又まれ也人も其姿あつらふ
へし其心をつくかしとて招くめる文章は何の心かあらむ心を其俗のてに
ちなる姿を世るに変化して其変化を志れる人々ふ姿を志れる人々ら
いふなれ昔の人の下事をまなひつるも道につらふへき心なれハ姿の変
化をまなひつる人もいふへし　されハ源氏物かたりとはしめ絵あるく
るやすきハ人の其捨ふ所の姿にれまちくなるへし　狭衣も歌にあえ
りとそいうつ伊勢　おちくほの古ふみなと清少納言か枕草子もへんてる

毎におもひよするにおもひてをしめ給ひあはせむとせしはいかて栄花物語といへる
ものを我かたにてえらひよくもまてはへりしを土
左日記にまうさしむなり日記におのれかおほえをなすれハ人のみてえらぬるもの
我かみておもふらんし記と紀とを同し心すなる旅に紀行といふるにあらやせ
に平家物語といふものありてひとつにものゝふの事跡をあはせとて祇園
精舎の鐘の声は無為のあそひをも添へる也平家物語とつけゝる名も物
に対しる意なるへし鴨の何かしか方丈の記にあそつる人なり発心集といふ
ものかきたるものとおほえぬるや四季物語といふものありて其人の作なら
あらはこそ撰集抄のいとこふかし歌の心のきれくるなりハまて撰者の
法師のあそひなるへし兼好法師のつれ／＼草かきたらんもおもふさまも作らん
か硯にむかひて物をかきとめ我は世情の境国にあそふ合点と見へたり或ハ宗
祇の鳥の花も或は長嘯の挙白集もおのれくか心にあそひてむつしの深き浅
つくへすくいふるのなし天か気をよせて月にあそひ地か気をよせて花におも
ふ竜吟すれハ雲起り虎うそふけハ風涼し梅に鶯紅葉に鹿いつれかかちを
つくりてあそハむ先師常にいへりし漢ならて之弟者也の四字をかくて貴

賤尊卑の詞をこまちみ和文ハ遠近遠波の四字をもて署し涼しの時宜をとく
のふ文章にまして近来遠波のてにをはとさへされハ一句の長短をあらはして二句の句
読をあらはされハよむ者息のつき所をしすれて海雲渤鷁腸とすり
つけゝらんはつらしき心やすらん世に出そふりてもおもひみそかられても遊
ふ中に我か此文選の時をかえておもふものなるへしとか

宝永元年甲申臘月日

文選 梁昭明太子の周秦漢より梁の代迄乃文を集て三十巻あり
唐李善か註に五臣の注を加へて六十巻あり

挙白集

源氏物語とて世にもてはやさるゝ五十四帖の草子あるにやさしくみるにいつれ
そとくりひろけてみしハみちんる事すちのはなきやうまてさふらふに
よみとられ給ぬかいかにとしふさうし其訓よのちくつれて由ハさ
なかりけるひらきてしあとへていにし六月半いとあつきにかけをおもの
き来らん人のうちに入てにやるのうつのきこらかましてものいとをかし

あやめなとの称をとるすゑしくなれハ志侍んに彼らハ此調なと
こまかなるわかちあるか如しなと
今我云此文段にいつる所く都ての文章いつなともなへしくよみえ
ハおのつから文意をあらハるゝもの也おのつと其文義をしるにいたる
ときハ意なく又いよく深からむ此文選に作者多くなる事を志らしめんとて
此序に代ての古き草子物語の題号をあけて文をつらぬる
狭衣（サコロモ）は大弐三位作うつほ物語三巻と三十巻と両部あり弁か物かたり
二巻あり、おちくほ五巻枕草子十巻栄花物語十巻いせものかたり
又いはせ物語といふ土左日記二巻平家物語二十巻又二十巻の
ものあり長門本其外あまたの方ありて犯聘長明か発心集四季にあ
かゝり撰集抄九巻宗祇竹馬抄一巻拳白集九巻
源氏物かたり一部皆寓言にハいひなからも下心すゝ世の人の色にこそみ
あまりめてのなるすなる名をとかへ事をかへ作る此ものかたりを天台の
四門に表し或は不可説の物語なといへり

風俗文選

自序　五老井許六

文は貫道の器（ウツハモノ）也孔子も余力あらハ是を学べといへり吾朝のむかしより大和国
の文筆（シン）庸にして車にみてむなしと世におとふかるに言葉おほくハ女なの筆
にして源氏狭衣のたくひ男女の中をつらぬ實は歌よまんへき道ひきつるかし
昔より歌連歌の文法すて誹諧文章の格式（カク）一世もなし先師芭蕉翁始て
一格を立て気韻（キイン）生動をあらハせりたとひ鄙言（ヒゲン）俗語（カゴ）にまじへつゝとも心は芳
野龍田の花紅葉をうらやみ和歌の浦に志をよせて難波津の細きよしあしを
わきまへしる縦横自在をつくしたりしもひとつの趣意を立るところなく
童蒙乃えい物つくしに落て果は相撲を仕舞となせる甚さむき下の名なる
へし今爰にあつめたる文章題は二十文は一百十有余篇皆俳諧文
章なりこれをよみ是を学て此門に入つゝして才子五老井許子六撰集を
宝永二乙酉歳自序して風俗文選とハいふ尓

文ハ貫道の器也

古文後集

集昌黎が文序　李漢

文者貫道之器也不深於斯道有至焉不也易録文象
春秋書車詠歌書礼鄙其偽皆深矣乎
文々ハ女史の筆よりを　誹諧文章の格式一言もなし
我ニ許六ハ文選を定める趣意をいつる文明之実なる女
書にも子等の歌との語をつくりあつめてあらふあれハなん
そのいろいの文章をあつむる者すくなむや後世の道たるへし
只今の世のもてはやし芭蕉翁没後十とせになるめれ
とも其つくられいまてあれハ道の盛に行はるゝを後世
よりしめ只々初心のくしくに文章をつくるへきれよりある
とあつめ置られるものなり

文質之道交轉無定
文聲婉轉而豔媚　質声淡薄踈散也

五老井の別墅ハ中仙道高宮宿と云宿中の書に京村といふ所
にあり此らハくるむ丘と云五老井とよふ井あり智静没して此
所の墓所ハ丸き石をたてて墓所ハ石楠艸のあたに植るまの名よ

を建られたり
崔豹古今註曰堯設誹謗之木今之華表也以横木交柱頭
古人亦施之於墓
白虎通云庶人無墳樹以楊柳古葬者松栢梧桐以識其墳
童蒙抄云山寺の南表にちやくなけのみるをあくまこれをたつ・
のちやく呼れいとひろの木となんかれハ坊主のよめる
ところてめられるれしきさとひろの木とハいふそたつる
才子五老井許六　芭蕉翁の門人なりとやせしくるなり
むかしより和歌の道ハ師匠を定るもなかりしなり能因法師
家原の長能を師とせしより歌道にも才子といふ事あり
此流く歌でつの成る所ハ乃かいける上にかるなり　長能

気韻生動　畫品有六法
一曰気韻生動　二曰骨力用筆　三曰應物象形
四曰隨類賦彩　五曰經營位置　六曰傳移摸寫

百人一首古説　加茂真渕著

後の人源氏物語の文にならひて序せしかはいにしへや物語らの語
の文なり序に序の弁あり男に男の文女に女の文あり此物語女の
みなりとしるへし
我か此序にいつるか如く源氏狭衣のことばをとりふみて誹諧
文章の格言なしといへる序文章つらんくらよく考へて序に
序の弁あり男に男の文女に女の文あり源氏をかゝりはたらふみ
なりとも作者のいへる識に格言あり　許六か序にいへるはひとへの
熱きなりをいつはりをいふの文章ありしを知らひとを文章
をつくるへきたよりとなるへし

大註解自序

風俗文選一名五老文庫ハさゝ波や近江なる彦根の
曹士五老井許六芭蕉翁の骨髄を伝ふるにおよ
大和魂もてあつめ選ミし文章躰に二十一　文に一百
十余篇諸く誹諧文章也百五十余年の今に
傳て誹道の文章の亀鑑とすへきものゝ一書の
外にあるなし　玉よりもいつくしむへくおもふにむ
かしくさ其深き意をしるへしされど種々の
文のうち高きもいやしきも古き事もよみしるふ
へき是をつまむ大をなるハ天地のきハまりなき郡村
里の名にいたるまで人倫の上よりみちはなるれ

しかるにいつく解しかたきも多し初学の人此
書をみて手をいふの文章をつくるへきならすよせむや
おもひあつめて解しぬるをもて先さまし其事の
道徳まにみ我いとおきなくゆゑなみかいさゝつえ
るかせみえる書あつめえなるかはよく先師し寄てたく
しまいいをまむや山崎乃宗鑑法師のかく
れるみ筑波集に倣る我もなたつては集にてよ
此書の註解此書は作者達の心に合へるや合ざるや
よし合へるも合ざるも倣ふるとも夫なつけゝる
風俗文選大注解とよふことゝなる

嘉永紀元戊申三月　芭蕉庵桃青翁門人
甘雨亭仏我七世孫
佐保姓　葎日仏我

凡例

一 此あけてあるせるハ本文とあるへし 一くゝりさけてあるせるハ
註解の文とあるへし

一 凡文章を作らんとおもふ者ハ先其道をまなふへし 道をまなふとは
古人の文章を熟読(シユクトク)して其語を諳記(アンキ)し其文理を解すれハ自
然に筆をとりて文を綴(ツヅ)らんとおもふ心起りて何となく心にあるを
文に著はすかきことにあつはまれる文に體(タイ)あり法あり 體
なりされハ文といへは法なられハ文をなさぬ體とハ體裁(テイサイ)なり
體ハなを文にゝゝるか如し

引書ハ万葉集より代々の歌集によりて物語の類誹諧の書にいたりて
ハ此文選と同し時代の書を引用也是ハ同し時代の人の文章を
あけて本文の意をしらしめんとてなり又雑書といへるハいさゝかも文の
たよりあるハ引用也又口つから傳へし誹諧なとハしらする證なしと
いへとも元禄の昔よりいひ傳へしなれハ引用て捨るにしのひす我か
友より傳へしなれハ其庵号姓名をしるさす我かつふとしるすハ己か
亡せ者なれハ強ていへるにあらす饒𩇕珴璠とするのたくひまてある
へしのちの正しき考を待もの也其引書正しきものハ書名をしるせハ
雑書の類ひハ書名をしるさゝるもあるへし
・又其物によりて其ちなみよりて本文にあつからさるもすら初学ひの人へく
のたよりになるへくとおもふなれハかきあつめハ季よせの題意ホの解
をのせたり我か老婆心としるへし
祖翁の門人多しといへともよ草ハ識の隠逸にして書を著さハつくらす
とめはよりて其句其文章多く傳らハ嵐雪も又よ草に似たれと其門人
みて句を文集にのせたるもこれと異なれハ去来ハ名字を好まハ著せる

書もおほし其角許六支考の三哲英才にして文章発句集物もおほし
三哲ハ実に誹道の達物なり其あらハせる書にいたりてハよしあしなきにしもあ
らされと嘉永の今にいたりて元禄のむかしよりいふ所の集物名のミのこりて
て其書の亡るものいくはくをやさらに支考の一哲のミ甚あやしき書あ
またなれハ今の世にも多くのこりて其首をなんするに足らす此哲のミをは
すのなり引書に用ふる作者の名字又ハ其人の行跡なとを證とする
にまかりてはいかん許六去来かあらハせる書に似たりの集ハ偽書なり
といへるは是ハ其書を祖翁に傳りし名字をかくし
て世に衒る心ある書といへるなり寿々の日記なとのたくひは
祖翁の筆を入給ひぬる上の集なれハまことに対して偽書といへる也集中
の句をよく偽りといふともあられさる甚偽書といへる書まて
捨るにしのひす引用ひ書もありとしるへし
誹の字集中言篇人篇ともに用ひぬれと本文のまゝにしるし
言篇なるに用ふとしるへし

仮名に古俳近俳あり古俳ハ万葉集のころを云近俳ハ定家卿以歌所の頃となりしころをいふなりさて季吟翁芭蕉翁をはじめ近俳の仮名を用ひられしなり此文選もみな近俳の仮名つかひなりされどまゝハ古俳の仮名づかひも交りたる文門書とも又仮名にあやまりハ一字々々改めハ原本のまゝとなしたるなり跋に汶村か風俗文選仮名つかひといへる作ありそこそハ一部乃仮名づかひの近俳古俳をわかちていふなり

風俗文選犬註解目録

前編之部

巻之壹上

作者列傳

同下

辞類

柴門ノ辞	芭蕉翁	瓢ノ辞	許六
示秋之坊ノ辞	支考	示古鏡辞	李由
送新道心ノ辞	丈草	焼ル蚊ノ辞	嵐蘭
鉢叩ノ辞	去来	四季ノ辞	許六

巻之弐上

賦類

南都ノ賦	汶村	鎌倉ノ賦	許六
吉野ノ賦	丈艸	松島ノ賦	芭蕉翁

同下

富士ノ賦	嵐蘭	湖水ノ賦	李由
前磨山ノ賦	支考	後九山ノ賦	去来

巻之二

賦類

鼠ノ賦　去来

旅ノ賦　許六

揚揮豆ノ賦　毛紈

四跡廬ノ賦　李由

閑居ノ賦　汶村

招蒐ノ賦　支考

譜類

百鳥ノ譜　支考

百花ノ譜

山水ノ譜

目録終

本朝文選

作者列傳

芭蕉翁者伊賀之人也武名ハ松尾甚七郎奉仕藤堂家壮年ノ時辭シ官ヲ遊武州江戸ニ風雅ヲ為業ト號桃青ト乃誹諧正風躰中興ノ開祖也嘗テ為遺功ヲ修武小石川之水道ヲ四年ニ成速捨功ヲ而入深川芭蕉庵ニ出家ス天下称芭蕉翁ト遊東西南北ニ説風雅ヲ助諸門人國中悉ク歸芭蕉風ニ一ヒ遇難波津ニ伏病終ニ卒ス年五十一葬ル江州義仲寺ニ

俗名甚七郎忠右衛門新七忠左衛門詳しく多し又松尾與左衛門母桃地氏宇和嶋の産桃地氏の女なり寛文之伊賀上野鉄砲鍛冶松尾甚兵衛なりとも云

正保元甲申年生元禄七甲戌十月十二日於大坂卒す春秋五十一

翁はじめて江戸着堀江町名主小沢太郎兵衛方に頭陀をおろしのち大工町に庵をむすぶ泊船堂無名庵義仲庵瓢中庵釣月軒風羅坊杖銭子ホの号あり小沢氏を俳名卜尺といへり

柳青庵とぞおもてうすらかまていろあく小兵なり常に柔色のつむ

きて羽織をきられけり
翁是にて元禄七年九月廿日女亭主が歌仙にて参会あり
かりそめのくさひらの毒にやあたりけん十月朔日より病て同十二日申の
刻まより七日迄のうちはかく
八日木節去来にむかひ今朝出脉を伺見しに次第に気力衰へけれハ
見えて脉体よろしからずとつくり侍りても薬力とかく叶ハす治方を他醫に
もとめんにハ去来師ニ申 師曰木節ハや柔和なれハ只たのみおいたる他医に
て虎口竜鱗を醫けれハ天業をいかむともせむ我かく悟道し侍れハ我か
呼吸のかよハん限りハ迚も木節か神法を服せむ他に求る心なしとのたま
ひける風流の徳人皆皆感ずることなし支考丁列去来をはしめとして
これハ去来心得て病床のきハんをたつねてやて古来より諸家の宗匠多
く大期に辞世ありさハかりの名匠の辞世もなかりしやと世につたふものもある
へしあハれ一句を残しおかせ諸門人の願ひ也とふし師曰きのふの発句
ハ今日の辞世今日の発句ハ明日の辞世我生涯いひ捨し句々一句として
辞世ならさるハなし若我辞世ハいかにと問人あらハ此年ころいひ捨し

句いつれなりとも辞世なりと申たまはれかし 諸法従来常示寂滅相これ釈尊
の辞世にして一代の仏教此二句より外ならず 古池や蛙飛こむ水の音 此句
に我一風をおこせしより初て辞世なり 其後百千の句を吐に此意ならさ
るハなし爰を以て句々辞世ならさるハなしと申侍るなりと治郎兵衛が傍に
り口を湿ほして終に息のかよひ語のふし諸実に微妙の有人
なりけるをみるに 九日人々の夜半とをして古き衣裳又枕具なとの
垢つきたる不浄あるを脱かへしよき衣にきせかへまゐらせや師曰
我辺地波濤のほとりに草をむすひ土塊を枕として終をとるへき
身のかゝる事くしお褥の上にしかも未来迄の友とちにまもられ鬼録
によらむは今生の本望也 去来と呂収目のあへきされ
まゝふと薬し入て吾舟にかゝせられ各詠しあく

旅に病て夢は枯野をかけめくる

枯野をとめくる夢心とかし侍るいつれなるへきこれも辞世にあらん辞世
にあらさるもなくあらん病中の吟也しかる生死の一大事をあるにも
なりてはたゝ生涯好し一風流といいひなからも妄執の一つとおもひかへけ

むかしわすれ去来ふたゝびあらはれ且ハ朝雲暮雨のへだておかれし山のみちの色
も捨なれぬ風雅の家を守るも河魚の患ひにつかれなから今ハのかきりに
其風神の名章を唱へ給ふ事諸門人のよろこび他門の人も末代の鏡
鑑なりと涙すり涙を流し暇あるもの是を見ハ魂を動さむ事あるもの
是を守るハ毛髪是に殊なること列生の両に感慨悲想して慟絶して
声をのむ是師一代の遺教経也さりとも此ゆふべのおもひをおもひて
十一日の暮おもひかけなく東武の其角きたる是も東武の住所同伴に来
宮の辺に初句紀句をおさめ泉州より浪花にまかり入しけるに師の病を
おもひよらずつけてこゝろも守ずさへぎりやうくにかけつけて直に病床にまかりて
後骨連立しうちわたる狭をたもとにかけ既に且はよろこふ師もえらみわたる
とて唯々涙くみおもふ其角を言ゐなくさいなみむきあひしを支考去来
支考其外の老人をかはりに病床の始終を物語しこれらよりこゝろ伽して和も
ひはしうて物語なりにしにて変の時比より師弟のさめぐるやう只そのうみ
をふくらすしきかきりなく涙かなとりて生ひかしき使あけてすゝめまゐらせ
中ニつき挽して摂てめさしいそぎ翌日去来の舎にかなり土鍋をいりくるを

去来柳よろしく入て押つゝき

病中のあまりすゝるや冬ごもり　去来

去来曰此句ハ他のよめるにハあらず予をはすゝみて師をなくさめまゐらせん
深く案じいぬるに惟然支考正秀ニもふかんとの
有り神(カツ)ぬかきこへけ路次屋いてさくら果に来りし正
明るまて其つとめにそゐて句作にぞ

いつきて藤葛に鶯の呼　惟然

おもひよる枕御もとくし冬ごもり　正秀

一生是をすていつれも句ひけ師も句の人くらきさかきり
なく十日去来の宿まゐるをつ時日なりけれハ夜もなく晴て日新さえ入るに
蠅のあつく日南にむらかりあらそひ蠅(モチ)をさしとらま上くる下もあ
るといふひて去りく各も入りひ去大病中のるなれハ思ひ侘のひて
去るの庵下る人なふ支考ら師の発句を滅後一集せん心頭あと比
の病苦も悩みのかしめ只今せねくしも今るきゝんよまま事ありてやおうつらん
と去来まゐらせりけれハ去来をかまりて師の心中を知りて放たるいふ

小さうきるとやさまさまの外師の平生をやすらかさきる好く、あからハ今る
やうやく情き辭をえうけたまへりて諸人なれしと初めの中よハ氣をなを運ふ
るより〆せ中てハ心を労しめやるの音怪なり此後ハ病床近くよりの輩
ふたりアらく其生を立の人と声あらてみるに次の夜もへ退き立かりまを支考ら斗
られのいひおゝて諸子のきやう面目をうしなひしか惟然よまた向ひ我
なるありとこなきの人てといひて

しかられて次の間へ出る寒さかな　支考

されハ支考なりけれハ師も不の吟てをかしかりのたまひける

鬮とりて菜飯たかする夜伽哉　木節

皆子なりみのむし寒く鳴尽す　乙州

うつくまる薬の下の寒さ哉　丈草

〇吹井より鶴をまねかん初しくれ　其角

ていふ惟然吟声しけれハ師丈草かるを今一度このよみひて丈草にやさされ
とかいつきてる寂志を謂ふ面白しと左ハかれ色かてかめのひをかう
いつかかりしきんのるるはまさとよろこひれるを木節人熟をはかりける

翁はまたいへハ其角其故を問ふ木節かふ病は保中の証といへるか大病中
絶食なるに微に食のすゝむるにあるハ甚危なり死期をさるにあらんといふ
さらに又各なきぬるに其中より又寒熱往来ありて物語りさはより
顔色土のことくなりしかなしむ人々も又飢のまさりしかやうなる
又実証なりといひ左右より舎羅吞丹をあたへけれハ浪花の医まきまゐらせて
命危く絶つく物語りハ十二日なかの薬を与ふる事ならぬといへる
あるハまた其角去来丈草を先にして向ひ居るを釋をもてけれハ臨終
なきまふることハ行水をとのひみの木節ありて制しけれと去来かさ
のぞみのふやむことなく湯をひかせ身をせんしゃうさを清むる次の木節か
醫術をさされしかるに謝すへしか梅之人の言を述べてあさらハ乙州
正秀をたのみ支考惟然に筆をとらせかゝる遺言のこまかに遺言し
ある病苦すゝみ又ほかのかれかく奇異のおもひをなすへし伊賀の遺書ハ
まつりのすゝめあひ外に京江戸美濃尾張かれこれさるへき遺言し給ひのふ
に始終にある人の中まで筆記す次第に声おとろへ痰喘まてなやみの
ふれハ湯中にて素湯にてのとをうるほしまたやすませて去来に向ひ

のひせん沈寅永阿闍梨より路通かるを作者其居油か丈草乙州ホチ
送りし消息霜露霜ハ以下拾ひ僕おしいろそくるもまそて雲井の案内
まうかの傍らぬ彼か数年の薪水の労せめくりすれおくれ残亡婦のハおよそ
まえ捨ぬれハ風流あり書へ述ぶるあとむ倚る諸子みな侍へありしと云
時のひて余言なし合掌正しく観音経ときとくてかすかにくて息のか
よひもとくなり申の刻過て埋火のあたたまりのさむるか如く治ふなりて
きまたせらるるようかりて床入のひぬとおもふふとに正念にして終る屬
纊につけるとぞ于時元禄七甲戌十月十二日申ノ中刻也歳五十一なり
即刻不浄を清め白木の長櫃に納め其夜ひそかに川船にて伏
見迄山供し奉る其人々にハ其角去来丈草乙州正秀木節惟然支
考之道呑舟治部兵衛以上十一人花屋仁左衛門か京へ荷物を送る体にて
長櫃の前後左右をとり巻き念仏誦経おのおのにて供養し奉るハ
憐をとるるほと哀れなりける[illegible]李由の乃りのてる利り合
りけらいさうて余うつりおとるるはうちき物語して程すく京はしにて
まよりに狼谷通りにかかりいそきけるハ十三日巳の刻 ひるまへ

大津の乙州か宅に入奉りて乙州か伏見より先立ていそき帰りさしおきを
掃除し清め沐浴の用意せし沐浴らハ道呑舟治部兵衛なり御髪の際ひ
させのへハ侍代まて丈草法師まかりけれハ法衣淨衣まてを智月と乙州
書をたる淨衣白衣まて召させまいらせへきを称らいうるうろや兼て
茶色の衣装こそよかれとすてて茶色をめされけれハ智月尼の手ぬひ
として淨衣を茶色の服にそせられける出送葬にて十四日に定りかきを
られ日没になりまいり義仲寺乃真愚上人住職なれハ導師なり
三井寺常住院より弟子三人来られ読経念仏あり出入棺か其夜
酉の刻之葬式いよいよ十四日酉の上刻とれきハむ豈の内よりあつまれる人
は雲霧の如く帳にひろかる人数凡三百人余あるいぬ近在よりあつまり
男女追おしき此しむ中居翁を遺命の通り木曽塚の右の方に埋
葬しまいらす十五日去来其角はしめ膳所大津の人々ねんころに詣して先
まて土かき上て印塔をかとよりあすひ塚のしるしに年ふりたる柳あるを
其まましておく翁の形見とて枯々の芭蕉を一もと墓て時々のひたる茶
の木の今を堅くる花と化るよつて植て手もて垣ゆひめくらし香花をまう

向なる日のもと廣しといへとも生れて其名豊芦原の浪にひきうるの徳
芙蓉の絶頂に詠ふ人丸赤人のむかしよりいさゝか末代の今日まてハ
實に我翁ひとりといふへし

翁先生芭蕉庵へ送る遺状

故先生没後緒念よりて思ひ出何様也又志ゆ候故此年
被寄此心静かに此謹修して嫁候事にて申上る市谷
故芭蕉庵意専老祝ふ残ル心得も事新由も十なる候
事なる者残し過て此おもしかる歎しかし此に候上

十月十日　枕青

亘

松尾桃翁様

我職に時に當申候

市谷　雪芝子　浩□子　苔蘇子　意専　猿雖子

十蔵　半残子　卓袋　土芳子

江刕平田明照寺律師李由の跡に傳へし祖翁真筆五百崖寫し

芭蕉ちりけに花見顔なる崖　うか

花に秋に　蛇ふくらひそ　存まうらん

岩にや声　鳴らさす　嵐の峯

秋すゝめ　菊の木　細や　返虚

嵯峨ものひと　此色の　笑ふ也　立り

芭蕉翁に寄せしや　伊賀の　ならひ侯

芭蕉を植る　辞あり

または植てん　まうむ　萩の二葉

六助　えかの　二人に　させ成　蕉を

顔として　五つの　あ　落とさく

いく千里　ありへ　翅ひそ　秋のくれ

猿雖に對して

もろくの　こゝろ　柳に　任ひつし

伊賀の　声ありよ　千代の春

まうの　雨より　もし　桑さくら

桜ものゝ　梨の　接穂や　山ほしお

題杜子

笠の緒に柳綰る旅出かな

古履や花の旅出の捨ひ履

相国寺にて

等閑に感心ある竹の林かな

春雨やきせるくはへて和尚の夜

古寺の梛千葉ふむ田男かな

留主といふ小僧ならん山桜

雪とけし跡むらさきの芽独活かな

梅折て椿に逢ふ隣の軒

逝水や椿流るゝ井の奥

吹れ述き四ツ谷るゝ残草履

尚白と浪花にて

呼ひ夜桜に見る木偶の軍

あらいはゞ鳥や黒戸の浪花

骸骨の画

夕顔や盆てうちんも翔　あなかしこ

何某の代あまた伝へて四季を飾る人に

七夕や雅児乃餓鬼

昔日や鷺脛ながき遠干潟

橙や伊勢の白子の店さらし

淋しさに釘にかけたるきりぎりす

つゝいて萩穂ひろふむ実乃まま

嵐雪が四季へやる謝

旅鳥二夜十夜ゝ秋の暮

角髪や男をうらむすまひとり

背葉やかくしてありけり蝶の亮

いつ秋のきぬたを鬢子のかくれ所

一足の手紙の先なり川千鳥

吾よしつせり祖翁の白菊は甚だ花見の記にて雛屋立甫翁の作なるを樅青翁のかたへ巻きの借りにお後きたりて停られ中の文章廿六くり発句廿七句を存せり此油物の我ゟかよ

芭蕉翁自筆　暮春花見記　立圃作のうつし　　今我家蔵

あれなるまつしろくむらさきたちて見えし
それとみのみるめもとれさりしおもしと
い庵ハかつてありけるあのいふことをとり
やまさむちちちなれハなそものくるしき庵
ひたし　しからぬをいつかくれハ

ちなのえるは助ろのとろ物てと托　白
わる人まそねのろきし花好く　是
よみるまの軒しておるやあつひよ　白
おかえたはたかなやくし衛風さるちる　是

読む其中をうつして同し心の人々の一覧に備ふ
爰我か家職簿を綴るをもちて世わたりとし祖父介雅父魚行ともに
古画古筆を好し是を賣買して家業の助とせり此巻物文化の始
の比買もとめて他へ賣渡けるを六年の冬に又なりし介雅か
方へ買もとめたり介雅みしきのおもひをなし其後我家の宝物と
して今に所持せり介我又家職をなりてもいふをも好み家業の
いとまある時のなくさみに道に志ある人道をとへハたゝ誹諧の
道あるを答て其道に導くをもちて祖父の徳にむくひ
て遠つ祖介我か道に志深き志をつくのと
我家業に正月のはしめ家弁を立て是を笹着栂といふ其はしめ何人
の業はしめしといふを未不孝弁は則簿也往古弁を伐て簿と
なしカをもちて是をあつめて篇とせり　笹着栂則帳也

浪化者東門主一如大僧正之連枝也號応真院居于越中井波瑞泉寺
一日遊洛會芭蕉翁效風雅後著有礒海前後集病薨年三十二

号応真山人示寂ハ元禄十六年癸未十月九日

浪化公俤写記　東花坊

今年神無月九日は物のかなしき日なりけり此君此別を此日をとそりすれ
ずられし中黒あるはかいさめたりし此心の例もなくしもなやかにて我家の瓊
花また御山をかけめくる若心の風に吹さそひ雲にふよひてはいまゝれやハ
世むりまほしくて此道のやつとはむすれきはハ雑行のつゝもの つるま
しくや此心のあつかひあら物さくめのはかせとてまのあさりありせり
れとさるかたやすらいひすしぬるれと今の生死をしるのおよるまてい
うて身の上にはいひぬハさくむそれをもつ旅さるに吟すまてし
日此君を去つるも道に斯文をあわれとしてる三越の人のなけきは
まうさらむや十とせのむかしらかの翁と洛の東花坊にてかりそめの風
雅をむすひぬつりしに終日に道の虚實をかたらひおこしくて風雅の
旅あけんとハ都を立ぬそこの法師とそくりかへりの旅をも越へゆふし
とをかしこまりちきり給ひてし其韵のあやしまてかくの へたくの日
の旅路をさく彼此の端まてえそめらんさあとたくひなきかすく

せちをせちおりしなハかくハ幸しすてゝ彼海とかみ山の一葉ゟ
遠く八将の外の心をかなけし　そこの花のそこに於ふはらぬて
しまつまに筆とりかけしていひもやれなえくまひのへらるもまれ
その花の雨かけのしなくの涸らをくめつし　下略
全文ハ文操に出たり

郭公　山里の存に鳴々つて　浪化

声立て将のむれのなるか淵かな

さくつりを黒くして居の小屋かな

秋立や鶯の樹木のさしのまゝ

水鳥の胸に寒けかくさくらの桜

京笠は皆釣ひきのかもりけり

　芭蕉翁の常に行脚もさびれや
　　極老て甚るをまけ甚人をたゝふ

里稲のまいや為殘めくりの桜の跡

日のうよしなるとて秋の神ふつ卯

名月やけつく郭の餞　君

実は忘とおりハ留主のいかの山

の篠の声もつきなやさこの月

葉細や隣て合に桃乃花

一本をくろうくと花見の卯

かつむしの嫁より薹まの二草かな

痘麻やくるりと織るやけ畑

　三月十二日義仲寺古翁の塚に詣て

何炎や皆のつきそふ墓めぐり

二二日頃屋乃匂ひや五月やみ

常そ細くも露の葉一つ卯

釈海は行を悟房のいきさかな

麻売をふみお皆戸の月の外

極楽をいつる月秋の十夜かな

時鳥雨のかしらを鳴て来る

大空や鶯の鼓る吹会せ

　句空法師か山寺に来りけるをとゞめて

豆数こそ為のゝ孫山をおとさはん

時雨にハ鬼もなかりけり　句空

去来文通
さくらもかへりかけたる小ぐるかな　浪化

浪化公追善
とりまりの法顔窓し出ず子達　許六

僧丈草者尾州犬山産也壮年辭ㇾ武出家隠ニ松本山上ニ蕉門之騒客也能ㇾ詩ヲ後三年閑閑ㇳ而終ニ不ㇾ出病死ス常ニ読ニ法花経ヲ一

年四十四

翁の上足丈草法師

東斎随筆云清乾ニ空晴法師の法孫已講の上足説法無双にして文珠の化身なりと

去来か丈草の誄に云 今はきさらぎ末の四日月にて草庵に終るものゝ禅師先よりわひしと湖南の正秀にもとなりあつされるを聞て見とり涙とゞめかぬ つゞく此人のむかしをわすれば尾張国に生れ犬山に仕へて勇猛の名をかくしとりや

今我ら丈草か誹才ハ晋阮籍に似たり田し諸にいふ 其後洛の史邦にかかり五雨亭に仮寝し先師にまみえそめらかしより二夏の嵯峨の内に迎をかし並ハ四方の虫縫の上に西をさしむけて吟會せし此人をかへ先師の言に此伝此道にすゝみ学ひし人の上に見るむかの月を越ゆるひとのくもりて其下地のかなつきなるらやむ一し志のほか性くるしみて学のふるすをぬすまん感おして吟しくみつし談し常に此るしてすみしくるか此しと

晋書曰阮籍字嗣宗属ㇾ文ヲ初ヨリ不ㇾ苦思率爾ㇳ成ㇾ立ㇾ草ヲ

花むしてまてゝ都の秋そまれ　丈草

夕立にはしりかゝるや舟の幟

旅行

て立て帆にふるる袖や夕しみ

かたひらにあくまう結日のおかけ

風雲や時雨をくゝる比良表

比ら山のしくれつきたる庵の上
廻廊やありつむ嶺の雪の松
一方に翁の傳ふしくれの碑

遊長今る

筆の鞘を鳴らせはしまれ
夕立のかしらへ入るる梅の御

孟郎観桃遊

桃はなしのちるさきは床のやま
降りくる魚のすそかや嵐と菓
聖靈も出てかりの世の旅枕
本家の入まつりり蘇の松
鳴きれて目さましもうし鹿の秋
みな山まつのて直に月の影
夜の明て蛍つかぬ桃杏の御
定かれと来りも鳴かれきりくれ
や猫ふきの油をねらむく渡り鳥
屏風戸にあたら家すや梅の花

元庵に岩をかけたり花むしろ
すしさの心とらし蛍　渓
雷おつる松を枯らしてつくしき
納豆するときれや嵐の雪起し
かは萩や町をうち焼いて鹿の声
一とりつまれ楊も柴衣もやけどける
堂頭の新夢まるにあるとこの秋
芭蕉翁の古きくもりつつあるを
桃舎庵に偶居して心殘すれは
去来のとくへ申さる
新しもや黒髪の法のくすり鍋
之し
秋霧や人なつかしき墓まわり　去来
夫山え像謁二句
風薫る羽織に襟もつくろはず　蕪
さかさまに扇をかけて又涼し　お草

僧千那者江州堅田産也居ス于本福寺ニ釈名明式上人嘗テ任ニ律師ニ
號ニ蒲萄坊ニ蕉門之高弟也
享保八年卒 七十三歳

千那

まくのおほろの形や梅柳
湖山の霞む夏かや生ル麦
水をみて謡ふせらしの花らし
おもひ子を叱るは似たり雉子の声
如月や雨にかはるゝ押やいと
塗桶のかたまるころやそのの桜
朝日にて三井の御坊のほかに
ちり花を見るさけにらが
夜月や知るるは猿となれ
菊の寺の浮橋し佛のさかりし
夢衰への酒債と見しかり
人を吐息をまるんとのまり
新近き岩梨あるに猿の皃

常舟よくつまされからぬ花千鳥
花や萩や似りとふれの軒の梅
屋ね書つく兒のすゝみ一ふさ
みゆりの妻乃唱歌に稀みの雪
法隆寺の宿坊由佛のちかみと拝ま
法禮のもちつもなつりし秋の萩
いつ迄か雪まつ如きを鳴る

僧李由字ハ買年近江之産也居ス于光明遍照寺ニ釈名亮隅
上人嘗テ任ニ律師ニ入テ蕉門ニ而学フ風雅ヲ年久故ニ韻塞篇突
宇陀法師之書ヲ著ス病死ス年四十五
宝永二乙酉六月廿日卒 号孟耶観 四梅庵

韻塞序

風雅の實は山の端に清ていまた芭蕉の跡をさかさしむるは此の
ころうをしなれてや、西くの揚貴妃よかうも申すに似せて見出をと

あらそふよ花の画像居をうつされ西更口定の筆にひらかく寂と消く雲
となりたんのち何を範とし誰を柱とせんと

元禄辛未十月宿明照寺　翁時に四十八歳也

當寺此平田に地をうつされてより已に百年に及ふとや御堂奉加の
辞曰竹樹密に土石老たり誠に木立ものふりて殊勝におほえ侍りて

百年のけしきを庭の落葉哉　芭蕉

御香備もちて銀杏の落葉うつ華　李由

家物のつくりや大根引
小春の元に念者きいやることつぶら
よつ雪や一めんに待る衆田の構
寒菊や火を積方の素瀬
大根しを鍋蓋ひとつのかさなり
上念のいのる柿の雪
御座神するすへておそくあしろ守
寒声ちら付する柿のあらし汁
すゞ掃やいろりまはつる　萬樹

ゆく春やきのふのかはり茶漬にて
春近き三年味噌の名残かな
寺町や向ひ合せの梅の花
やぶ入や親なき里の春の雨
下前のけしきも宿や春の雪
あかい立の髪を梳くる柳かな
雛までのつきあひ時にて花見かな
ふきりや大佛前の雪消や
五節句にはなれしやー季者
ゆく春に飽や二千の鶯清声
郭公加茂川の水ふ法師
簑笠も荒物ぶしや川おろし
苗代を休てかや荒るる
おちふれてきつとて町内の夕まくみ
やき立のめしの匂ひや秋の風
下前のあつさにおる暑かな

衾の端よ汀のおくるゝちどりかな
はつ穂を今てわすれぬる日の月
名月に蕎麦の花さへ照りけり

乙丑年同追悼

同年の花くつをふて袖の露
顔やさて花咲けり菊つくり
むく起や岩の紅葉の錦あり
秋のみちを結びかけし芭蕉
葉細の一ふる風ひや秋の雨
蛙の声の中よいきうぶまぬれ
田仕まの中るも清き芦苗かな

病より起て平田より

苗しろの際や病後の顔つき 許六

月次の折遊

風呂よりも帰らんまぬるかれ
紅葉かるるとちるるなるかな

宇治川のあそるハ昔二位入道の

本寺 汶村

乙魂なりとも幾々代の世に
かしこまり合戦なしに花の蛍 許六

支考字ハ盤子號ニ東花西花ト亦號ス獅子庵ト濃州之産也入ニ蕉門ニ業トス風雅ヲ一方ノ門人也先師滅後遊ニ東西南北ニ説テ風雅ヲ助ニ諸生ヲ故ニ往々慕ニ支考風ヲ者多シ矣中ロ遇ニ居于勢州山田ニ後ニ帰ニ故國ニ作テ誹書數篇ヲ辨ニ俳諧之論ヲ

濃州山縣わ郡の人也各務氏黄雲山大智寺僧鉄叢主といふ十九
出下山 東花西花 野盤子 蓮二 見龍 白狂 黄山 梅花佛
十一庵 伊勢 獅子庵 享保十六年十一月七日卒 六十七歳
東は盛ふ附に東花坊とよび西はおふ附ハ西花坊といふ華の字は栄也光也とみて其はじめハ東花集西花集といへる東西二集の名よりなり
支考むしろ末のはじめ其寺の紅葉を見て
いろはまだなれてちりぬる紅葉かな 師の坊やりて其跡に
山のけしきのあさき秋風と何なくり さるを我備父の古風をす

おほくてかくいやむつれ盃母ヶ有のひも此故なれハ今の花さくくさ生
知の支考も也へきるのや黄山を小野て丑寅にあるを山を黄雲といひ
寺を大都とつる鷲見の美濃守の建立ゟて玉浦一派の本山也
十一庵ハ伊勢の山田にあり庵十一日に普請出来て月十一庵といへり
支考壮年僧くりし時駒込吉祥寺の江湖にあり後他寺まうつり
時く深川の芭蕉庵にいたりて誹諧を学ぶ其角嵐雪杉風なとゝいへるの
来りなり俳諧十論をあらはし武江の芭蕉庵まて来話禅と
いふ録をあみて翁の行状をあつめ我家の風雅を弘めんとて
昔有婆子供養一庵主経二十年常令二八女子送飯
給侍一日令女子抱定曰正恁麼之時如何主曰枯木倚
寒岩三冬無暖気女子挙似婆婆曰我二十年祗供養
得箇俗漢遂出焼却庵　茶話禅は是はなしといふなるへし
支考虚言談に死阿難話して追善集出る支考卒して門
人蓮二あらといへる竟なり

やねふきて風やすくなれりけり　支考

ゆるさて長刀のさや花の朝
唐の声おほつかと何る里
山吹や春をわらして青葉の朝
ゆるや末のみちに雪の降なかし
かの果に並して知ら椿の都
世の中をとりての観や　衣
肩衣らおのくすゝし帆かけ舟
ころ立の花うちらす彼岸の車
横堅に織りせえそや雪の糸
是追ら　くしとらく　春乃雪
御封切る廊下の口や気さくら
すゝしさや凧ふむやみの眺つらひ
禁じらおほしき庵のいちくこ小

四十の春を迎て

菓めらて死ねといふに花の春
さくらさくひとくに弥陀の彼岸の時
侍ら勝さく　出らけるつらふ
恵心孝に奉りて　世をあらる守

長刀の五條もすゝし橋の月

草鞋に掃よる旅衣脱に掉の実かけて十日十ならず

なる山や雲井ゝのかゝる蔦の影

神風や伊勢の山里なる橘氏にむかひて(?)まのあたり

十四年ことしに六十の老をかさねて古への方に陽説の御むかひ

をよまさらん内外の御ほん前に此心を發しまゐらする

まのくくの別をさくへみいつかしとおもひまするや

烏ニ護ニ増賀夜一ヲ

なまへ一羽鏡にうつし年こもり

花ニ感ニ西行一時ヲ

花よりも涸や幣にかしこまり

賭すて降忘れさくら猪

くまなくくてや猪のぬすみくひ

猪の(?)を白酒売の名残の(?)

時なるかぬ我身無山

里の子のこぼる同(?)一の車

文僧のくるしみ三年の(?)八(?)まゐるまでと白

の納涼に扇一本すてせよまゐる

かゝりつの別にあり　鉄五る

粟の穂をえあくる時やかゝつら

何ともなくかめしゆく秋の風

わりよき手河原鶉ある小菜畑

一霜の(?)や芋のすんと非

ひとつ家や一葉くれ秋の霜

みちに枯て伸ほのかし鶉の首

水仙やつゐと出れは紅の月

梅うるひの鮎ま立よるゝ一日の車

鉢ひき彼岸(?)小蔵(?)

ちりくるり春や牡丹の花の上

支考の武江を旅立けるに

さるかなと見えみかとせ山さくら　分我

咲ものの中にぬけ出て尾つまけ　乙州

又すみなる旅のおくはや花なる　桃隣

西国行脚餞別

無事も精進の友よ海松(ミル)海雲(モヅク)　許六

晋其角者武州江戸産也生医家不学医術終業俳諧
寶井氏號狂而堂蕉門之一人而後起己風著誹書數篇
姓榎本氏母方の姓による竹下東順の子也初名源助といひし時は神
田お玉池にすめり宝晋斎は米芾が硯に鐫するの字なり
晋子　螺舎　雷柱子　渉川　有竹居　狂雷堂　狂而堂　六病庵
善哉庵　　宝永四年丙亥二月廿九日卒

晋子終焉記

類柑子

李白鯨に乗て汗漫の風にあそひしは酔中に月をとつて家族の
気象を述へたるなり今や晋子三年の病根より誹情に富て我をあ
らはし奇を吐顚をとき人の口に膾炙する句々皆志るところ也ここに二月
三十日はるかにもとの泉に帰る倦情よる所なく葛のうらちの口の淵
まさに誹灯の光をうしなひたり余多年莫逆のちなみをなし此月
二日宝晋斎に臨みていささか吟し侍りけるに

春嘆宗妙空の唫とかく

鶯の暁寒しきりきりす　其角

貧の水底蜷むすふ行、　青流
萩草に普請の後従ひやらん
渋実ちるの身ひかりけく、　角
月も行ぬるひより椿へもつれお
風のかけらる留の番よ　流
房の道大葛の外に立やりて　角
洞さる、、刺もとつてら　流
ようすまのまた水にあふれ九条流　角

一摩夷の刹に晋子病みてききけさそて別とぬ悲さ生おおきめり
吟友の今呉ひあひすれは春兵らかのひたし秋の気を感し竜渓禅師
の九条殿の水雞は啼まつのひし水中の天の一句古今時節の物ついて
居栄露月の光をしる石友の契をおもひおもてなるものなる
なり

散らしとて年ちるもさくらかな　青流
芋の露かり余をつまむ涙あから　其角

まかハことに未覚笑へわくまれ
ゐらぬ衣装我らつ縁なり表かり
赤の子等りつとさすらふとしけれ
　嫁る見て
氷るも　盃とちよ　形の中

嵐雪者服部氏不知何許人業風雅遊武江蕉門之高弟也
後別妻出家ス
　雪中庵玄峯居士　雪中庵の号ハ他よりむし於之
雪のうちの芭蕉いつれるかくちといふをもちて雪中庵の号を
かむありつ宝永四年丙亥十月十三日卒歳五十四　駒込常験寺ニ葬
　三夕の内　定家
秋あふる笠屋の秋の夕くれ
松風り里に袖するしくれかな
　と母とよめる
五月雨ハ我もふのむしや母遠し
　嵐雪

きりくれ嵐の笛かつて降らかめ
軒の梅桜と蝶よお目つかうし
標佩てりさとめてしや芝肴
　法花をさす侍りく
つまあとに秋もあらぬこくつ事
主道ら秋うすき門のとゝろの歌
星合や哲女も契ひの糸とらむ
舟のさやかり様の床のすゝみまくも
　其角が母を悼
ゆへて音もなかしそれらほとまれ
あふおそや凡上うる　花の山
石女の雛かしつくそあいれうれ
柳より咲くうでおのれ嵐の夕乙る
年ひと歳せざり諸さし日乃嵐
え紅や晴て斎ののかくり
出代やおさな心すりあみあつさ
アやくいすの花みまかりつきかこの姉
桐柳民こまやうる葉めしかな

草鞋や鼻の先の明る

すかしあへ

其角

自画自賛すて下ヌ小松一本とあり
半中揆くして画をうつすもあるは

千我家題

我庭や よきすハまぬ 青鬼灯
図見かと 妹 つくろひぬ 庭の門
ありけよう みうらこえぬ一 [illegible]
[illegible] 其外の名ならへもかし

辞世

一筆箇 吐一息ちる 風の上

野坡ハ越之前州人生ニ商家ニ居ニ于武江戸ニ蕉門之学者也一遊ニ西海ニ不定ニ其ハ居所ヲ随ニ師ニ得ニ炭俵之撰ヲ号ス

はじめ江戸にありしのち浪花に住ス樗木社と号す老後先師の無名庵を高津にうつして高津野の翁と称せり[illegible]年月を志るし蕉門の徒に附合の俳を請けるに人を載ませるハ多かりしとなり

春草の [illegible] 音かすかしや 朝鳥
かんのりと日のあたりける 寺の [illegible]
[illegible] のかきみおほくよ [illegible]
[illegible] 顔の出よふれぬ 捨子 [illegible]

あくうに [illegible] ふしくれ [illegible]
[illegible] 咲 [illegible] の花
猫の恋 [illegible] あはれなり
七种や [illegible] 切 [illegible]
[illegible] や 門 [illegible] 豆鼓 [illegible]
[illegible] 花見 [illegible]
[illegible] の月 [illegible] 門を叩きけり
人声の [illegible] この車
秋 [illegible] 下 [illegible]

あるへの別墅 [illegible] 其夕 [illegible] の方を [illegible]
[illegible] 雲を [illegible] 虫 [illegible]

北枝

北枝者加州金沢之人也業ニ磨工見ニ蕉翁ニ好ニ風雅ニ北方之逸士也

立花氏として金城の磨工牧童が弟也祖翁其誠を感じて北方の逸士と号ス俗姓三郎 [illegible]

卯辰集の序ニ

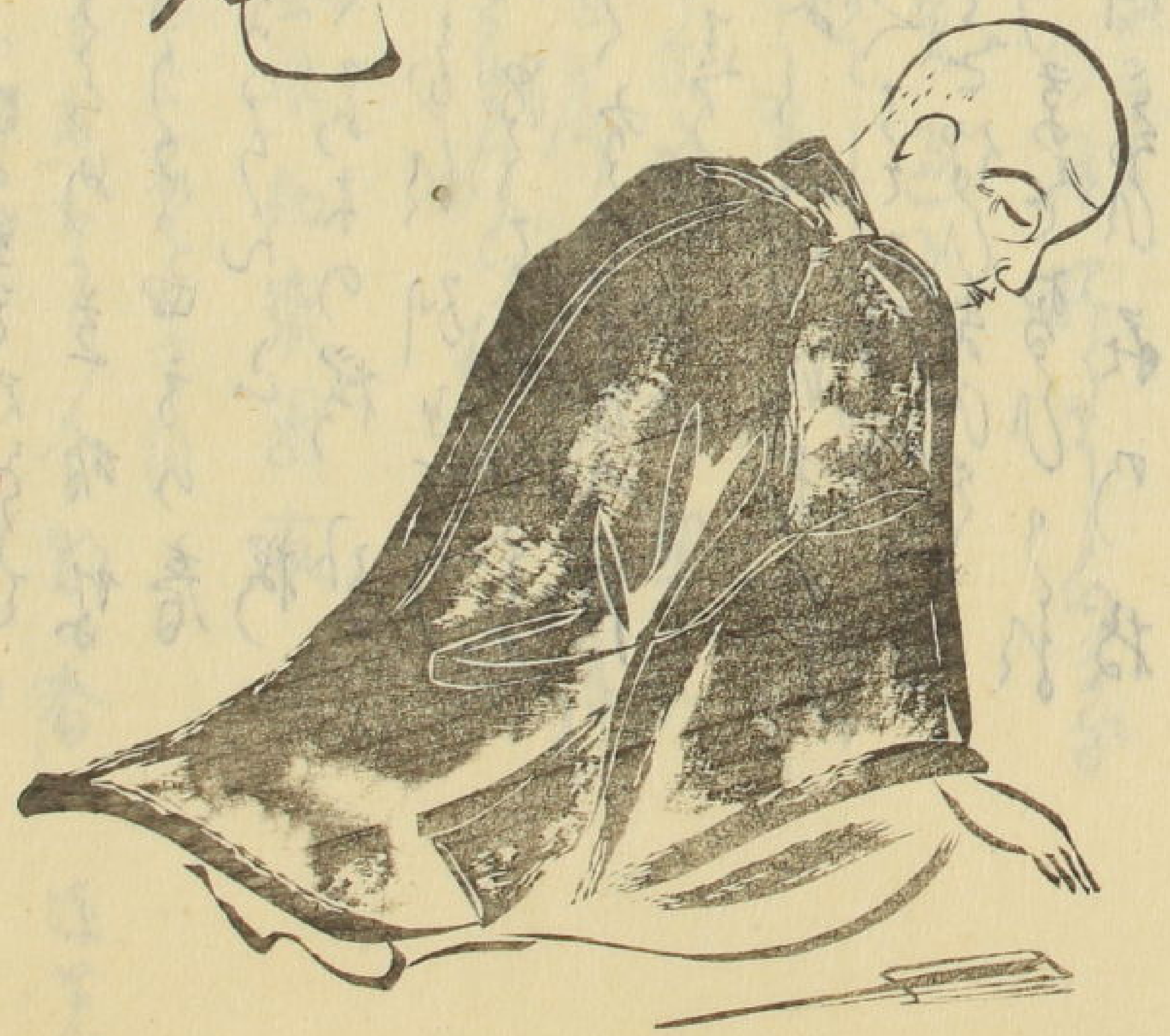
立花氏 [illegible] を袖にして [illegible] の

雪中庵山嵐雪自筆のうつし
蓼翁自画自賛の写

このしら菊目にたてゝ窓のまうや
むの晴

仏我家就　雪中

八徳乃姿見足し
雪乃庵



蓼翁画
多流写

ちあるまとんくりのころりくせしもとうあつやくく

四ちりて落るや春の花ころも　小枝

妻のくめ松風ゆらく雪の上

橋軒　夕日さしたる夕霞

夕ぐれの鶴り蝶の立をみるまて

めぐる露みてゆくらめ立胡蝶

湖や心はしりく四方の春

風流の文字なからん山桜

とまかりに胸さくあの木の桜かな

牡丹蒼て心も乱れ別きたり

溢しさや一尺波らて行ゑる

なる行死志けく家を岸の月

ある義を送りて

白露まろくありみのくれまで

行気ら咲まくてそ荒みかれ

み国の山かるさ伊ひまゐりく

籍まき物望つき見て習ひかれ

播磨や露行こ荻の枝

山中の温泉にて

湯を抱て湯の月野きまりの家　我多

秋風や息災うるゝ旅人なり

冷かなる我が身のゝしかまでく乎

十月や時ならぬ雨とおとかへり

おもしろきなくてぬすむ神楽かな

物よやる人も庵れお国の月

於牛国やさまりらむ秋の風

涼菟者勢州山田ノ神職ノ人也業ハ風雅ニ初號團友

号神風館蕉門ニ遊んで乙由と名を等しく

これも亦これも盛なり今朝の春

市中やるよかけ出くいつのぶり

菜の花のあるしや庭に白拍子

鉄さげく叱にむるや桃の花

細ところ志賀の都の牡丹かな

一ひねり秋点すれつふみあり

涼菟

きぬ〳〵やきくふとこゑよすゞし　其蛍哉
夕ぐれはいつもあはれを秋の海
青き葉をさらんと結ひて柚味噌外
松たけやいろりの湯より捨て斟
　秋さめや松風の里も此辺迄なる
こゝろなる音ぞ鳴つきの浪の上
川音よりも鳴し鳴る鰍　一の部
垣草の古ふる室ーし　桃花
株藤をうちとどめる花の笠
種もの俵やちよなおきし
瓢らんの夢や信をはかられ
蝉鳴や川を横ぎる本のかけり
新田の花のちりしや駒乃声
　昨夜の秋の扇ふるふを
掛もる我色見せむ桃花
ならしくて蚤一匹とまり給一の部
七夕のをくるゝあるや市の海

　男世帯のいとすけなきを手
あるのまゝ四ツに眠りや玉子
見し影は月を憐の指一の部

露川者伊賀之人也生ニテ尾名古屋ニ居ニ商家ニ好テ蕉門之風雅ニ

露川
鶯や葉をかけかけて捧る光陰
中将も露つゆて鳴らうら一の車
出来町の大きな店は蔵家一の部
正月もまさに蝶々さし　猫の恋
ひとりねやせんべいまたしする鶯の月
名月を襟を張して帰るの部
五器皿も当座かくし人の野の霜
汐とちて上沖ろや雲雀
柿包むるよりなしや村時雨
粟めつや庭にかゞまる今の松
見掛かや稲の田つらのまんまさ峰
どうなら算をつかの庭や　正芝

くさかゝめ花や我翁に踏る日
嵩をなけと卯月乃別毛一ヶ月
我らむに推してえくる小庵一ヶ所
花にまていろゝるを多るの翁
時る鳴やしつゝのに笠の菴

ちか考餞別

見送らん花も霞も坂見坂

芭蕉翁にはじめて逢へる附

奥そこもおくて本の楢かな

小春に菊のくとさくらのむし　翁

雲鈴者奥州南部之人産武壮年入道自號摩詰庵婆
旦入風雅師東花坊一渡佐渡島著入日記

雲鈴法師行状記

其傳にいふ雲嶺法師は支考の人と成て鈴の一字を改奥州南部の産にて
なにがしの侍郎なりしが官途の塵に世をのがれ始らく武陵の

雷柱子風をおもひ中ら湖東の五老井に社をむすふ僧ならもあらす
俗にもあらず酒をこのみて色をぬまざるは鮫沢の隠者に似たりと
ちる年あくあるけれは彼飲中の謫仙にやと其ころの人々たゝふ
れ今ぬ中宮享保のはじめつかた越後の出雲崎に草庵をむすひ
ちす白の老を養ふべきに高田直江の風雅をあらそひ栢寿なさ
まよひ新潟に揺ひて気力ますく人に交りは酒に世界をとん
やがて果ぬよ⑭のさくひを立て世らはさはこゝろをかきるとお自害
らんでこのちとしきん人をかゝらひ旅やらの物をさくせて二月二日
の日に髪をうちあひし衣袈をも改て人ゝ人ゝをあつて旅に
つきぬありと例の我ものとし人ゝを強て指も盃を狼籍なる中に
我ら今此樋にへて一生の観法をとけんと云ふ両我息のうへなん
のちらさるかへる斗ひいのかつりいひ盃へきる二ツ三ツかさて其旅のはし

辞世　お代とあの世へ二月二日かな

さりし一生のんでぬ々ふの酔くるひや娑婆の名残のさの
とあつはおの汚を踊りかるつゝし其するくくもあさまく
人もありしか年の時斗に息をくて酔つる色なきとさめけし

らよりて説かれるが如くにて　下略
此句世に面説ありたるハ
　　此代にせや　浄土の冬まかせ
東日記に云
水淡に雲鈴洛陽東隣に除風と定りて君に尚雪青橋の二老人ある
しに露堂にもあられ我にもあられ只のみてすんやらぬ
同日記にも去春に病める者をいたはり
雲鈴に此世帯をはなれて餅もやき茶も煮つゆし
一
　　薬鍋おろすとるやさしく袖　雲鈴
　　　雲鈴洛に帰る餞別
　　むかしに焼て待人ありやなの榾　許六
吾仲者洛陽ノ人也居ス于六條ニ業トス佛画ヲ好ム風雅ヲ師トス李由ヲ號ス柳後
園ト著ス柿表紙三巻ヲ
　馬戈人　百阿佛

文操
　　柳後園画賛　馬戈人
柳の雨のおすめれてハ　ならぬ心のおとろかぬやら
花のさくらも花の数ならぬ　此画の筆にさめすや　る阿佛
　　七夕姫和讃三首
早の影ひも天の川に世をかりそめの筆の橋其暁をとりかへしてさくかな
姫とも名つけたり　星のやとりの花やるに玉のすかたも青丹よし
其つまるを忘れたはたきおみ姫とハ名つけたり　星もおりのきぬくに
一夜の秋の袖きく洞をろきに木の露の朝散姫とハ名つけたり
　　おくけやたきる声のたつれ　貴
　　六條の豆ねの渋浅やなの雪
　　おくけを嗅出せんゆり　月の岩
　　五月雨や風つれて来て戸を叩
　　ある智恵のありても咲りけしの花
路通者不知何許人不詳其姓名一見蕉翁聴風雅其
性不實輕薄而長違師命飄泊之中著俳諧之書

路通ハいつれの所の人なるを志らす翁か乞食せし時数遍を人の下に
みつけしを翁近江行脚の時その乞食の中に見出して風流の誌をのこすへき
初めの時の歌一首肩かきて翁望せしをいやしけれと
露命ををしむ浮世を旅のせかひハいつとも草の枕なりけり
翁称して曰我いまた居所に住つくる路の露吟の歌枕を叩き發句
の風雅を得し今ハ俳諧のみちきはめて生涯のこのみ手師家
に從て来る事を作者の情深く其より路通の名をあたへられる

路通

大切に雲こそつめ今日の月
芦の穂や手に袖よりも鞍あしれ
いかしと人よいかにつらしの風
はしきれ笑ひてかゝる牡丹の露
つゝ散てふくかき葉の道
ちつきやたま露まて降まて
元朝や行くなりけりと逢ふ
ころもかえや白きハものゝつらぬ
野の菊も見えすあるハかくれけり

蝶乃菓乃ふりも落ゆく咲乃庭

草庵を捨て出る時

きのふ時氷に沙くてはするも也
大佛乃ありしを花の壁一つ卵
鉢たゝき叩きおさめの声をきく
肌のよき石にねふらん花の山

難波にまかる

床しさハいつつ角出たる濱の芦

近海の知足子ハ世戎翁のちなみまて級枝のさめの定てはよ雲子やまうハれ甚心さしる今も
むかしさハ子みつ待ちて古翁の月忌にさへ
あつり侍ハいまはあらぬやいとろこのめつくに
をまねき逃毒を得さいぬこなつかしき世の腕に
うつひるつる一手おのひなつかしと志てうなつかしハ
子ゝ為くるやむかしの枝やすめ

凡兆者加州之産也業醫居于洛学蕉門之風雅一眾事
不知其終處

吹風のおのれや空に月ひとつ

凡兆

升のみのかを誰にまかすへき

落柿舎にて

豆植る畑も木部屋も名所かな

鳴つてけ餅売ありあくさ哉

大年をおもへく年の歌の那

凡兆 追善

西東とのかけろふ於法乃糸　許六

素堂者山口氏也居二テ武陽一避二世路一隠二テ深川一友二蕉翁一善ト

今日庵始信章又来雪　享保二申八月十五日卒七十五

山口氏江戸の産也季吟の門に於んて誹道の達者とよはるのちに主

家を辞して深川の別荘に蓮池をかりぬ友を集て晋の恵

遠か蓮社に擬せしより誹家の其つ人を社中と称するの名によれり

其ハ葛巣己九月十三夜於園中十三唱

其一 今年や中秋の月心よからん少々雲霧のさはりもなく

遠山も此の園に動き出るやうにて先の月の眼もてはぬ

冨士筑波二秋の月を一秋に

其二 寄菊

あのしや二夜の月に菊そよく

其三 寄茶

ねさめて唐茶に月の湯夜かな

其四

青ざめる心や月の十三夜

其五 寄蕎麦　月に蕎麦を占の古き文字

そうろ我をはらふよしかなり

月九ふあかの蕎麦のよの花ひとつ

其六 畠中に霜を待ぬあり試に筆を立て

気氏におのゆるかなし月見の事

其七 同隠相求といふ心を

むくの木に韓るをもし月と我

其八 寄芝

薮鉄より見るぬ月の庵の身

其九 寄蘿

遠くとも月に這かゝるみとりの葉

打ちあはぬ時もあらんかし

其十 一水一月千水千月と云ることをおもひて

我身ひとつの月を問
袖につゝむ夜 月いくつ

其十一 吾

月ひとつ柳 散る木の葉より

其十二 寄芭蕉翁

去年の今宵ひらく彼庵に月をとりて我ひて我の人ありつる
この信ありありさらに其の月よりおくれて木曾の
夜もまくらぬまゝに猶ひしけらし今宵も又月の冴し
けて庵に松をたてゝ深くはめさるべき月のおもひ
出まつりて陰のおもひ出まさんとするつゝ
むかしならば月を肥てや かへりなん

其十三 園より帰る

我をつれて家わかつる月かな

楽器画

採雪筆

龍太鼓

青海や太鼓ゆるみて春の声

素堂

中琴

蕣花やさまざまの琴の塵 芭蕉

右笙

けしからぬ桐の葉落や笙の色 其角

嵐蘭者不知何許人松倉氏業武奉仕板倉家奉諫速辞官
携母隠于武蔵浅草蕉門之老手也為月遊于鎌倉病死

俗姓松倉又五郎 江戸谷中臨松寺に墓あり

道灌山にのぼる

道灌や花はその代を嵐にて 嵐蘭

初市や雪に漕まる若菜船

水に月やぬめしくはぬ夕すゞみ

素堂の蓮池に

白雨や蓮一枚の捨あまり

笑ふても漕ぎ似ざる木槿かな

更衣毫さつき笛のとけるなり

二本目の扇をおろす暑かな

餅つきやあかり幕くる船の洲

郭公まつ朴の葉にかくれしや
分を越おの朴の葉によせて
楽行を人目をうらみ朴そ
心得ぬ花見のつゝやすまひとう
青柳につよく結ふる胡蝶かな
炭をきむ音さへ冰る棟ふたつ
くひものに家入やつる花見かな
振るにふんしてや川千鳥
盃顔に風の手や雲乃跡
淨波をうちまの濁す波逃けり

荊口者濃州大垣之武士也宮崎氏蕉門故老之士也此節
千川文鳥三士之父也後ニ致仕シ改ニ名東宗ト一

盟とりて花見の香のくちさけり
も乃ふふ菜とあしゆ寺の細
まつりもや七夜の秋の稽古かな
古郷にきるい杉ありさうしき

牛の子乃角や結ふんとしてすれ
梅咲やまくひをむしの秋ちらう
狩の草や学ぶかりのあし依め
白雨乃青葉からくの青葉かな
すくさる麦の中よりかへる居
代士のうくねとしたるにこりけり

去来者肥前之産也後ニ随ニ兄居スニ于洛陽ニ向井氏也中華蕉
門之高弟也號ニ落柿舎ト随ニ師選ニ猿蓑ニ後ニ病死ス年五十三
向井玄勝老人の末の子にしてつくしの方に生まれ俗姓平治郎洛の
長者町にすみ後に嵯峨の落柿舎にうつり宝永九甲申九月卒

秋さくらきみ涼しや夕さくら　去来
さくらひらあの山桃つ花　成盛
甲陽軍鑑をよむ
あゝ蓄妻の志るの武士なるかさ
池のつゝ雲の水るやあくてる山
冬枯の木の間に祝ひのむ　賣孟ほ

蕉匠の今は俳諧の力なき事かく入るゝと定まるもの

野晒や心を捨て十五年

塵くさいへと多くや雲乃門

うきふるや竿に別れ音ちらすは

えりや露のものゝ春のちから第一

古里の梅に盛中は くらひけり

旅寝して思ひわびき草の枕ぞ行

ちとせのよ照る畑の草ぬこのむ

高潮や池より入れて桜花

海原をあつめる磨よ海の端

けふかり花となりけり 夷かり

遊女とさは身まかりしをいみてく遊女なる人のかくれ侍る

露かかり此世乃外乃身ちけふ

誰くも東むくらん月のくれ

嵯峨よりおつりておりし休息仕ひなれば

月ふり宵 我 里人の葉かくらん

長き旅 草 外よ残るらんゆり

年の瀬や人のまあしの十斗

宮る夜を情よむかひてまよみに婦

うきくをゆくらききかん秋のうれし

せめよせて雲のつもるや小河岸

わすけや人よとらまし鼻の先

うかれ来て出る入するかわとらすれ

さみたれの庭をくるめく稲ひかり

いろいろの花となりけり 麦の跡

石も木も眼よかゝる暑一つ哉

山崖の里かせきまうしくもの家

九重よ見れぬ雪の宮さかり

年もとしや牛の尾ふとの高よのけ

去来ヵ手紙のうつし

須日土芳草袋陽に御中進し候ところ故人翁の一

人ふえ立中にも尤も不易来の使ひ羽旨陳随の自

分の是ニ事なれはゝ古雉史よりの故の中にも通亡師一七日於

御霊前御追善之百韻首尾致興行ておき候得満足仕り

就て其席の御伝来之鳥羽の文墨を立中にも此文墨くるへ御座

及も候事季吟老人より亡師江相傳り候て風雅傳来之雅物ニ而御座候
根元去ル貞徳卿より紹巴江相傳り致貞徳季吟亡師と傳り候得
斯之重器ニ御座候を亡師一代尋常ニハ所用も無御座候深
川之草庵と兼而近く候處ニ先年猿蓑集撰ニ及就仕吟声之
砌深川より取よせ江桐箱其後ニ義仲寺江さし置申候亡師も
此門人之中ニ而傳り候様ニ御座候ニ付亡師ハ一体此俳諧之
事を左様申候者共ニ而無之着なされ候而ニ者衆ニ而ハ無御座候全躰隠逸
禅中風雲之行状ニ御座候を傳不傳之私ニてハ無御座候併此後ハ其帰
にてハ御座不申此段此儀ニ打捨置御座候を一道立不申永く芭蕉門
埋レ候ハんも存候幸此節其角来り在られ候故於江戸其角嵐雪
申合候而ハ左右とも相定め思召候二の御意東而御座候ハ丈坂ニ而霊前ニて
右文臺譲り之事申聞候得ハ其角頻りニ辞退いたし一路まで候得
申候許六ハ病身木節ハ老衰美濃尾張ハ遠方ニて手届不申外
ニハ蕉門之者故一先右文臺を義仲寺真愚上人江預ケ置一
二年も過候て蕉門の者之内抜群之者も出来可申上人ニ申置候

も路傍之焼香風史共又ハ風雅も忘れ貧地獨居故不住心底ニ
申候所ニ此度之沙汰ニて八ツ頃ケ置候得共只今ハ道心之御人然ハ候
得ハ忽角申入節も無く此上を右之雅物ニ附而之義貴方ニ而預り置
可有之来春ニ成候而拙者も参候而直談ニ而仕候則其元思召ニ者ニ
持せ進候譲り御受取可被下候 以上

十月九日

向井去来

松尾半左衛門様

貴翰拝讀先以此節之御様子承知致候下来季候
然者鳥羽之文臺之事仰下され候遂一承知仕候如貴命右文臺之
事ハ亡師より預り置候大切なる雅器ニ御座候由右之雅物ハ
譲り候所心配之取而去ル方ニ奉存候處ニ其角ゟ去ル時節ニ参り
合取られ辞退之義も承り候不兼相ニ存候芭蕉門人ニ其角嵐雪
ト申者ハ日本ニ而俳諧好候者不存者ハ無之候然も門人中ニ而何人も
遠方之門人ニも有之候得共右ニ付而拙者より御預置申
候而其儀不能其義候得又真愚上人

此返答ニ及ビ申候ニ付存候将又拙者方ニ暫ク此頃ヨリ不被旨
志シ禁ラレ由ヲ承リ候ニ此度俗士ニテ罷在候得共風流中ニ不拘
志シ候モ頼リ申境界ニ居候テ何分ニモ先生ノ雅物ニ預リ候ニ付此段不負
雅方ニモ存ヨリ此段ヲ申候得共遠路春ヨリ成申候テ拙者所試シ
翁ヘ上申モ御座候テ仕置申シ候義ハ方ヘ申遣候テ承知仕候此
存生ニ在候テハ此段ヲ見ル通返上納テ仕候ヘモ先文通貴雅方ニ
此頃ノ在テハ此備ニ差寄申候ヘ共芭蕉魂魄モ在テ為備置候
宇袋士等ヨリ始末之義ヲ申候恐惶謹言

十月廿六日　　　松尾半左衛門
　　　　　　　　　　命清判

向井去来様

烏羽文臺一脚　黒塗　長一尺九寸　幅一尺二寸　高四寸
　　　　　　板厚三歩　筆返一尺一寸

右ハ師翁桐葉ニ而季吟翁ヨリ先師ニ相承ニ而所重器以
今度拙者ヨリ御頼ニ付差遣候事其中此段縷如件

元禄七年甲戌十一月四日　　　　向井去来

松尾半左衛門様

但ニケ処底ニケ所ハ小指ニ先程一ケ所ハ小キ釘穴
四方角損し有
　　　　此文臺今長崎ニ有

万子者加州金澤之武士也生駒氏號ニ此君庵ニ蕉門之英士也
此君庵　水國館　其地ハ竹林ニ河水をめぐらして座敷をかこみ
これを名付て銀とつ茶席を此君庵といふ

正月やかざりは鮮て夕附枝　　　　万子
岩根ふミひとあくやミ桜
蕁草の名の人めぐるあつれぬ
嫁ぞ山男斗の精舟の師
　　おん人の為ニ
おもつる新の歌かく扇の車
一ときせや鮮つく的のますれ矢
花芒粧々下まひてくりかへす

學爲者加州大聖寺武士也河地氏蕉門之英士也病死

木導者江州亀城之武士也直江氏自號二阿山人一蕉門之英才也

師翁稱二奇異逸物一

春風や麦の中ゆく水の音　木導

此句始ハ上の五言姉川やと窟しけるを春風やと

直されけると姉川ハ江州にありといへり[illegible]

あをきれの薄茶つむ籠子の那

縄すゝれ臭くなくる頭巾かな

ふるき戸の押画にかくや水仙花

千鳥にくひきられしる馬の鞍

冬こもり鞘の間のかこひかな

冬の月杉を洗するあらし哉

鰒汁ふきらの音乃宿の軍

臘八に何と叩くそ鉢たゝき

やぶ入の君の[illegible]の薹

梅かゝをくるく柳の稍かな

まずくは矢橋をわたる師走哉

大井のあらしさくや山桜

附るつら胡桃の志げり哉

三味せんの音きそう宮々牡丹哉

花芥子やにほりつめたるあくまり

角力取の腕に付けり蛇の苗

禅門の珠数持そふる菊の花

めりめりのよつて額や菊の花

日代よきつと向ふや廉乃暗

月蝕の夜にあてゝし白牡丹

きりつくと秋の御座の椿の那

いまりや今の作もしふりくと

吉ぬるのさへつ列る碇の那

さし樽の餅館うつしすまし哉

ひさかたに月をそもとあしの守

やりおくよやあとめる京の年め哉

十二羽の声の中なる　彬逸つらふ

本尊ハ名木にて京中一本のくつさくらなり
手あまよ花見の席をまうけ侍る
拝おのこれや家中のまつさかり
雛壹のならめて㒵々神桜
子供衆の古あいさつや初桜　許六

汶村者江州亀城之武士也松井氏字ハ師董號ニ九花亭ト
蕉門之達士也嘗テ能書画繪ハ師トスニ五老井ヲ

二ゝ月の雨よりふとき柳かな　汶村
桜ゝきいや山の大師のまつり日
秋はまた咲すかさかくりんの月
時雨ちる庵や八ろ谷の竹の幾
見よとりのかしらも宮し　指京
苗代をえんあてゝてかへる　唐
鯉の巣やりょう人家をちるまでて
せゝ家の三つ目の日はしやかまよの花
くらのうちはちくつかり　葦松

草刈や葭の茶すりの茸いちご
さみだれや焙炉をかける貂の臭
こなたまひてすらしや雲の縁
中入や雨をまへしを一すゝみ
さびさやるをの秋の秋の風
十六夜のけしきなるき比良伊吹
蝉の音や株ずけ葉のはるのより
埋火や根ふとのいてむ秋明一のかひ
茨廊はやもの日を秋くのかつふり
春雨やたエ暮しや北の院

汶村一周忌追善
咲きかゝり又穂まゆり花すゝき　許六

毛紈者江陽彦城之武士也北山氏号ニ大雅堂ニ好ニ風雅ニ愛ニ画
圖ニ師トスニ五老井ヲ

雛水の影をうつるや　薦莉檡
又是に擧ゆふちのこゝろつゝみ

ひとつ家をおしまはして 時雨中の家
雨晴は足袋田の菓子のさへの姉
節季仕事すてこその 祇じの姉
乞食の妻見るや おほろ月
春雨や茶囊の上のむしろ 烏
百姓の新記 [illegible] 姉
うつ秋や 悔をしよかかる 雨
稲めすな 所をかすや 小田の鳥

程已者江州亀城之武士朝倉氏号ニ白日堂愛ニ蕉門之風雅ヲ

狼乃道をつけたる 薄かな
滝つぼと啼て 見る小路の姉
傾城まくらいつの 涙くる 袷かの姉
蝉啼や玉用の中の昼 儀式
僧壁子何とくるりて 秋の風
取病する八専中や 粧の花

朱廸者江陽彦城之武士也寺島氏号ニ甘露堂ニ年久シ好ニ風雅ヲ而入ニ蕉門ニ病死ス年四十二

一ときりやるせなし 神無月
塀くらく桐乃植や 冬の月
[illegible] 足 [illegible] の 桜の花
[illegible] ちる [illegible] 昼寝哉
著 [illegible] 萩を [illegible] 雪月哉
[illegible] 力 [illegible]
[illegible] 次第の家
[illegible] 頭巾の姉
[illegible] の士のあつまり
[illegible] の貝すまし [illegible] や 生身魂
朱廸

撰者許六者江州亀城之武士也名ハ百仲字ハ羽官森川氏号ニ五老井ニ別号ニ菊阿佛ニ一見テ芭蕉翁ニ得ニ正風躰ヲ賞ニ血脉道統之門人也常ニ友ニ李由ニ撰ニ俳書数篇ヲ

百仲俗姓五助　初　金平又兵六助　三百石を領す
正徳五乙未年八月廿六日卒　系譜ハ業戸辞てあり
法名五老井無無道無居士菊阿佛
癩瘡を病て死す　絶焉之偈
一時ニ打破ス屎蟲ハ壺　芬芬タル臭氣供ニ梵天ニ
下る年死ぬるをとおもひしは上るもの死ぬる屎上るもの
五老井百年忌彦根の俳士許川といへるものつとめけるに
文化十一年集冊ありし其序の文にいふ
百年の後人に傳らん俳諧乃諦を一世の居後に持るといへは
文章を百代乃西に及とゝまる先師許六蕉門通統の
ひとりなし　只鉄心石腸の氣をひるかへし天下の俳士をさとし文章
に労を横へ既に蔵幟後住来問答を普く諸生の迷を晴さ
しめかひりける正に百年の忌に向て床の山に隠る駅の東の旧庵
を窺かんと其遺風を志のつゝかりく水鶏の窓戸を叩きは
東西南北より傳ひ来る諸好士らあつまりし隣のものつへ

あつまる雅ひとなし懐旧の腸を干作者半百の筵にあふれ
さは彼醯吸の三翁を阿の方よりのそむとみへしは今此節なるを
そのすゑなるへし比ら文化十一戌歳卯の花降る日五老井澄
てつく万年よとまさるるを祈り不絶武川の妻種ららら
る粟ヶ丘の笹根栄んるを誓てし趣をもて井をくさ
となつくるものなり
菊阿全集其外諸にめくる句を集るになくるるなきに
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　許川述
真白なりかしらの花やとし男　　許六
春にきや遠来まるる神矢根
餅くひの喉乃廣さや御代の春
四方に杉子をすくる今朝の春
水上乃滝のよとみや橋そ絶
元朝やきりのく明て何ぞ紋
脇さしを横に出して雑煮かな
　　根の葉よこかれ
元日や板食台も御人中日

四ちらまつく声しかのくるし年胃
つくる髪のかゝ伊勢の川にいやしきれ源内侍の
老たる紫式部に近ともに我こそし五のつゝの声とをえなれ
てうたへる春をまちて

源氏する錦みつる花に春かれや
二条の時しを識くるゝ慶このあ
高砂にまたひくさこや謡ひそめ
堀川の総しは前てや摘み若菜
時々戸口や若菜きれるぬり木履
薹ころの年玉寒し階ひ暮
芥焼や鈴精進乃ちこのへり
猶子本に汝まよふの花卯杖うれ
買立乃足袋乃うけや春の雪
ひしけくる菜園の上やそろえ皇
営みの笠を出てつんむ春の望
節人やみそみ手分て春の雪

六年十二年進善

節小袖十三年の春この卯し
春遊や湯女のまゝ系 分て遊む

舌おもて春かれや藤乃暮
くりゝとも錦のよるや桜花
勘署に三日暮やうぢの花
三井寺や倶舎よみかる梅乃花
春ちんや菜花くる里の毒
観修寺に菜花の宮や梅花
営みの母の花菜やくゞんのお
一村に佛光ちりそう名の氣
根に梳は梅の桜木や梅花
お豆まて大根や梅の花
梅乃まやまつく香やみの色にうつ
梅の香や春の鼻おく浅黄梳
梅ちるり濃花色の小袖つゝ

芭蕉庵懐旧

と鳴かんむかしのほや梅花
化粧する鏡の中や霞乃お
池の坊柳の帰る春しかく
西風は東近江の柳しつか

めくりくる春のうきを立柳　卜了
鎖へつきて鄭絢門の柳　のぶ
うすきあり人影うすし出萌　一車
鶯や鋤あと指行し千里
うらひすの鳴やありける紙衣　一車
菫立乃目てる人や　潮窓
白魚にしるや子の鬼のおおあし
たつ手や涅槃を拾る　東福寺
斗てるも涅槃のまぬら　仏一守
木仏らの時勝るて一々　孫はん係
涅槃會や拾ら立してもの付の
四条から五条のはし　や勝日
さしうは雛子の遠音や　濃緑
町中や虫ひろよけて　花乙
てる夜や油菜種乃　二世　帯
冥札の上まやすらふて　乙多つ鄕
白河乃寛見てこむと　嗚雲　庭
ひよひ花ひと見えてや　嗚　墟

菜の花や山吹舗りなく　陸
草餅にしるしのこく　陸っ鄕
八ツ橋や田井あそそ　常陸
住吉春納
月おゐかうきとまの陸　一つ鄕
陽炎や今を出かけの　茶舟當
かけろふの中やしま鞠の　土ぶり
陽炎や塑のめぐる　杉乃雨
かきらうや我より先へ我　乃影
田つりのほて蝶の　立
すゝき原やたくる　の蝶の　立
紀行
餃輪の糧も　つくれは　須磨明石
うらやまし　菜の花さの　独活蝶
菜の花や豆の森めしの畠けむ
君か　あたりをてらん　いつのまり
草餅に新の鉄や　うすぶ笑

いくゐまつりにあけくる雛の市かな
ゆきくさに二階の雛やりくの花
好ましき娘の座や雛節句
あらためし箱のにほひや女節句
盃遠かすみるぬるみに
色花ぬいとる孫や女雛
乳母いまだ今日の事や雛祭り
美しきふらんの旅や女雛
淡路島汐干にくれて三日の月
出替や絵仕事をいとひけり
出代やいさかひくはぬ百姓事
京かはりや京順礼のうちをきくこと
出代やるの郷子出の乳の人
出代や野にあくむさし坊
出替や町亭の好きの新搗飯
出かはりや昼めしの時の念仏

こゝろや出替り時の店さかし
目出たさの頭さぬ賤か茶碗かな
龍宮の鐘の内かや花くもり
振年のうちもちなり花盛
鈴ならに立けふかりて花見かな
たてこ好とかく家さぬ花見かな

草木のとりやまきものゝうち他のたくひくら
やまれし巳かゝちをかゝる花ひよく草も牡丹と
店をかゝへて盛をとるの時されハ貴きにいく
ゐる位まきいつるゝの和歌のとくなるといふ
けるゝとひ

春の種もおもしく出かゝり花盛
春さかりハ花は迷はん陽の空
ちるもいつかよくちらし花盛
焼豆腐無當なるしや花の盛
西の宮素納
花を咲て神の草鏡も千早振
我山のさくらハ年ゝよ盛のころすて病よ
ふせりあつかひて花見もしくり

早稲田大学図書

ゑらゐ見ぬ方や声ぬ鶏さくら
清水の上より出る春の月
山伏の山より下りや山さくら
當麻まの東かけきつゝて
蛇のきぬ脱きて掛ける桜かな
和濃の夢らく
聟いり夕ぐれさくさくら哉
きつゝ着る衣や錦の小屋
苗代の水に蛙らくさくらの花
須磨のあまのきくゝかく
石山のさくらも散りて 須磨おもし
伊勢奉納
今もよる月日の花を拝みけり
大鳥居を出れハ山吹霞にて
細蒼き春よりつけ本氏の花
銀錆に一枚春のお日つゝみ
春の日や花ちり乃 金扉陽
遅桜や千の宵ある春の雨

伊賀 芭蕉翁より
生飽もからびてすゝし 春の色
寒しはくふ年のあふらや夜の雨
二番より春ハくれぬ 紀之井日
枝持ゆくや春の暮日のくもり音
庭列も済之月て暮くれぬ
萬の人は来る小路まで来りぬ
上ひとつめきて大工やうるしの
生鳥織や世々白妙の衣
鞍つけすゝりや見衣
服て千代寫沢所やころもの
角鋲に脱つきむして絵一の部
豆の都や柚の実咲つて 里衆
貞家も来る出てまつり
天国て秋葉くれり 里衆
七所の所を参り 足持へ
灌佛やとりあけ法の外念佛
佛法を経にしる声添けし

青麦にしづかく鶯る浴館一の糸
石佛鎖の童ありはしめの子
井のもとを覚て無てるや精進日
汁の宴のさしめを咲や時雨
柳子葬らくるきくや郎に
橋の乃尾の更さや五月雨
臥し花乃笠の滴りや子日面
あつまり鳴の菖蒲や囲み屋
氏の月は城の色れや土用丁
和尚らく写てしする栗の扇夏
誤の声しや古殿橋よの崩きしは
さ波の志らむや妻の尾花川
里の内やまりも夢あるよしろ夢
いづ野らよ附木の幼恵や妻乃秋
おく古皆秋来なりまるの秋
うたつきの世の中まうる牡丹作
春も亡てあまま けらし 白牡丹

舟の子竹屋るくるさし根ま多梶
時雨らく、や向ふ名の尾の上
新田夕田金田又田やあとかれ
腸立の佛もさし、や時多
思ふ名めの春らしぬ夜や牡丹
山椒の芽を添て待そあとかれ
なつかしや勧学院乃ほとゝきす
白川を戻舟や京路あとかれ
紀の玉乃宮甘よなくや時雨
下京も大かくきらや節ら
狼よりもそおそろしほとゝぎす
まつ鳴や東坡が意ます時雨
みしかおもとのむらさき世や茶子の墓
みかわ採手なれば牧食らく世の秋
まめしの名しあまる名の収め一の事
五尭風まうつりて
舟宅のあやめは木もとの雲一の事

あやめふく女房のかみにやあらむ
あやめふく粽の手行の手つゝじ
峰の雲に又や粽の見続し
立さはぐちまきの中やえなれる
さみだれにかゝるや木曾の大津賀
焼火焼く天気さえて五月雨
さみだれやぬれ炬ある草の庵
鉦の緒の掛りけりや五月雨
天蓋を誰か送りてる宿の花
青瓜の青葉にかくれぬ若さかな
病中吟
紫蘇の香や土用のうれしむ旅ね
何とせん名つけさへつ花か
夏瘦の留主を頼くや田かへ時
早乙女のさみだれ髪や押かへ笠
観音に飯つきむけて田植かな
めしもるに娘の出立や田かへ時

大名の質のねぶりや田かへ歌
早乙女とくりとまける田かへかな
八橋に十日とりきて田かへかな
あらる見をさかりかりしや紫野町
あらのゝ末野の秋の牧をこうれし
笛吹の牧よくりかりけの鵜
牧きしやしや書おすむせる唄の声
夕立に練なこのしかりし大根畠
夕立やいくらの気の雨やしくり
夕立の雲や屋根土葺根治郎
夕立や身なけたるけれ善薩池
虫干し晒土用の中のさかりかな
大仏や横股あけて土用丁
土用腰股ておひろる雲のうすき
かくひくに打で生きやとる乃雲
狼の子をそやしもる麻の中
さしあてゝ小倍すも涼しくへさる葉

あつくめてしてゑ更しくらしき寒の風

陸奥大納言ハあまりの暑さにて夏の内出仕
をとゞめられ九輝にて宇治の橋姫よこたわり往
来の物語をきこしめし宇治拾遺を作らせ給ふ

真葉くれ眠るゝ人の九輝

押うつて低くなふ顔や物語の硯

世をよ夜めハくるゝの明けす西瓜そよ

昼顔の呆ったやうにころてん

蝉の声あまりて涼しき萩の露

桐の葉よ落ちぬしせみの声

信濃路や縄を吸ひつゝ瘦法師

五老井の芳をまつる彦根の地よろしき

ゑらそハ五老竈といへりさまざまの夏の月

天井も井のままですゞしき夏の虫

そら豆をくりかへて暑さの形

粕漬の瓜を砕くるあつさかな

大木を極めて存くも

下

六月よ万作なしや食の穀

己がさむ秣を重て夏なしの稗

あつい夜の詩を頌しくる水のよ

瓜印の指でつまむや霜定菓子

盂蘭盆の餞別

夏空や花の宿坊の秋くなり

夏痩のけしきハ見えぬ首の骨

須田町のまつりに秋の秋

朝月のなつめて秋の秋

上弦のちくりとつらぬき秋やらぬ

七夕や平仲ゑりの名あつさ

七つかの名人器や用し糸

雅とめ陣の月よめや星まつり

夜もすがら眺めしや星の林

星合をすゞのはやあけ鈍鈍

浮雲や日本斗よいくぬまま

天文者の天知るも天の川まるこそのうら

素麺や引きてなかるゝ天の川

秋たつや 野なる萩まくら天の川
油汲せぬ星の雲りや 銀河
地子のむれ京や所縁の玉まつり
所霊の落葉ひとつかけ絶飛
精霊のふくふく落ちすな 柳 薪子
精霊はあしをかかれて旅なつかし
金くれる松の文もおくり玉まつり
傑きぬるは燕子花哀や墓参り
夕めしは魚のいさきや墓参
やふ入まゐらて京のたちよりの子
送り火の麻木ふらをとうり
下草らゝ入るすたれまま京角力
角力取の取り戻し 秋
十六夜やおくれて遠める駒 迎
新蕎麦の信濃をみしや駒迎
空高き星影をおくれ 駒乃旅

若古代の真なりと云へり我よりのむかしむかしの八
夜ありて水草清む山中までのかたえ名月のとき
おくり迎への音は其所にありては
平将の首筋指や 駒迎
稲つまや はしらとしめ 京の上
いふつまの方や大仏の女の顔
大石内蔵が硯とうれしき人のあまり
硯の銘に石の湖
代かくふ石さえあるを稲 まつり
葉のけまのうるあつさや爪の苗
湖田のはしのかりそりや立つ秋の風
唇の葉くらみの 秋の風
七月や地獄の火をも 秋の風
七月やまつ雪の穂は 秋の風
市中や土用をぬけて秋の風
男川草はのこる人あり唐かし
搗餅や始まると捨て唐かし
きさまれて呆進むし 唐からし
鬼灯の種をきらつく汲衣への所
きりくま咲くや あさまの芋 俵

くらがりに世帯よびつく虫の声
干鮭の眼へかゝむくるいとしの柳
きりぎりすやいつしまきてむしの声
松むしの鳴や大衣の菜碗五器
八朔の節句によるやたのむ夕
西行もとまりし軒なり小夜の月
名月や日本なる三保の浦
名月や浅草寺も静なり
芋を売る錦の帯に運月おぼろ
いつの秋より李由子許嘉意に饋らる時の賀す
芋の子乃名月を待こゝろかな
堂碑して唐の古人に似て月見かな
好色立ちて掛むさしの月見かな
紳の市頃も長治の月見つの帆
名月や古侍の室鷹香
漸くく琵琶をかくて月見かな
□嫗やめぐりくるての月
名月のうらも扇の二見浦

名月や鉢の向よの須磨明石
名月や大赤穂の塩くみに出る舟
名月や廬山の芋は雨の音
張さして東坡が八景後の月
呼寄せて晩鐘するや後の月
名月を明日とも跳なり明日の
一天雲なく晴るをいとふ趣なり
明月や一声くもる天津雁
くもりなき秋の月影や須磨明石
味噌摺を干して切てや秋の月
須磨は芭蕉の涙寄るの月
も会せん月の都の外が浜
石山に入りけし三井の月
かくほるに頬そへて居花の郷
醸の月にて嫁女の男に夢富一つか
稲の花川や野菊の溝つゝみ
新開の中をわきて立てきぬぎぬ外
惣門に鎖のさゝれてきぬぎぬ字

坊主子のよ持て来ぬ尼のきぬかけ
ひらひらひらるや池の水かゝみ
駒下駄八ツ竹のめぐみも
於年の名みじかし雲の掃
白ぞらにすゝむ夏の麻や芒京
小男鹿やちかひおくる麦まき綱
かゝるゝ魚かり野し麻の声
廿日もう小ぬ涼しのあしらひ
若やあしらて西紙綱秋一子
一番に葉子こと比秋の一帰
子かふておほゆの尾根へ秋の下
花いろのきらつく袖や今年の菊
菊酒の加賀にまし人者信よ
きくのるいや嫁入相者のむかし
世代や草の紐の中の落日和
紅葉そや宮に咲るそてつ紅葉子
ひらしや奥の亀田尾花の子

草好や秋の侍に秋まつき
五老井草雉
松茸やらりらりらく菴
ちんちはや種とと草の庵
ちんちはや戸さ世代の氏
三送路に踏餞別
秋草の野の草堂に子
ちんちは都の
内近東た大江の秋もし
近しとおもふや秋の走
三井寺や見に神の神無月
稲の喘すゝめ入る十秋の神
下京の男のそて近十秋の車
刀さし綱と廻や見かし
息清甚かの中にかるや日本橋
楷の出三代四代に出つるしうや
我祖父に誠信の序なり

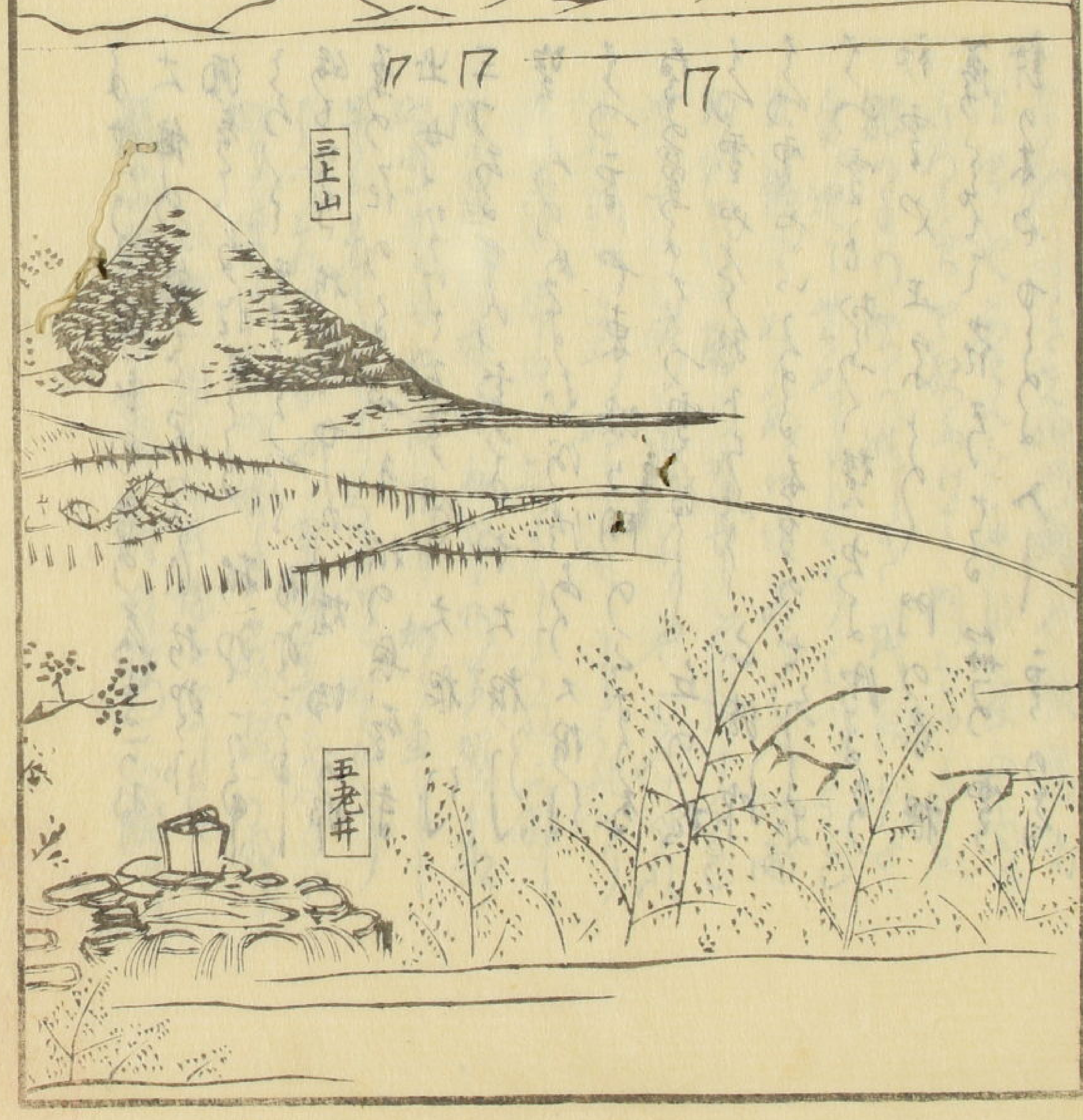
なつかしき先祖の樽や銀次者
埋火やふとんをかぶれは茶の匂
うつ虫や打あけて門を叩く音
鍛の音の響に淋しき　残衣子
食焼て茸あつしらうをつくらむ
大仏もぬれぬれ代ありつ時雨
ぬれぬれる鶴の啼中　初しぐれ
世の中は老のくちやをつくれ
おこ坊のまつめぐみぞしぐれかな
今年の市をといへしくれかな
時雨るるや女中の多賀参
時雨するはや能因か車し
牛を牽て去りゆくや時雨かな
そつきのかや　葉のさかりつつ
からす凍る尾の破る京衣かな
亡師一周忌に画像をかかげて
鬢の霜至るの時の姿かな

まどりの帯衣の音の冬菜かな
大仏の鐘さくえの枯野哉
酒売て帰る枯野かな
ころりくと重なりかかる枯野かな
鍋も枯野中の焼場かな
菜の花のうえや冬枯の真盛寺
出女はなけて居つや大根引
三つある中の重の子や大根引
蕗くつのぬきゆむ沼ぞあり大根引
そつや東坡か胸のくすり哉
鶴の巣のそつ雪白し丘の松
そつ雪や分下らぬ亡法師
そつ雪やいろのある本郷の七ツまで
そつ雪とおふく横出るは清まかり
初雪や正宗よの門の京根
篠つゝみて花ちる無門の雪
餅の木や中しめる入し夜のまど

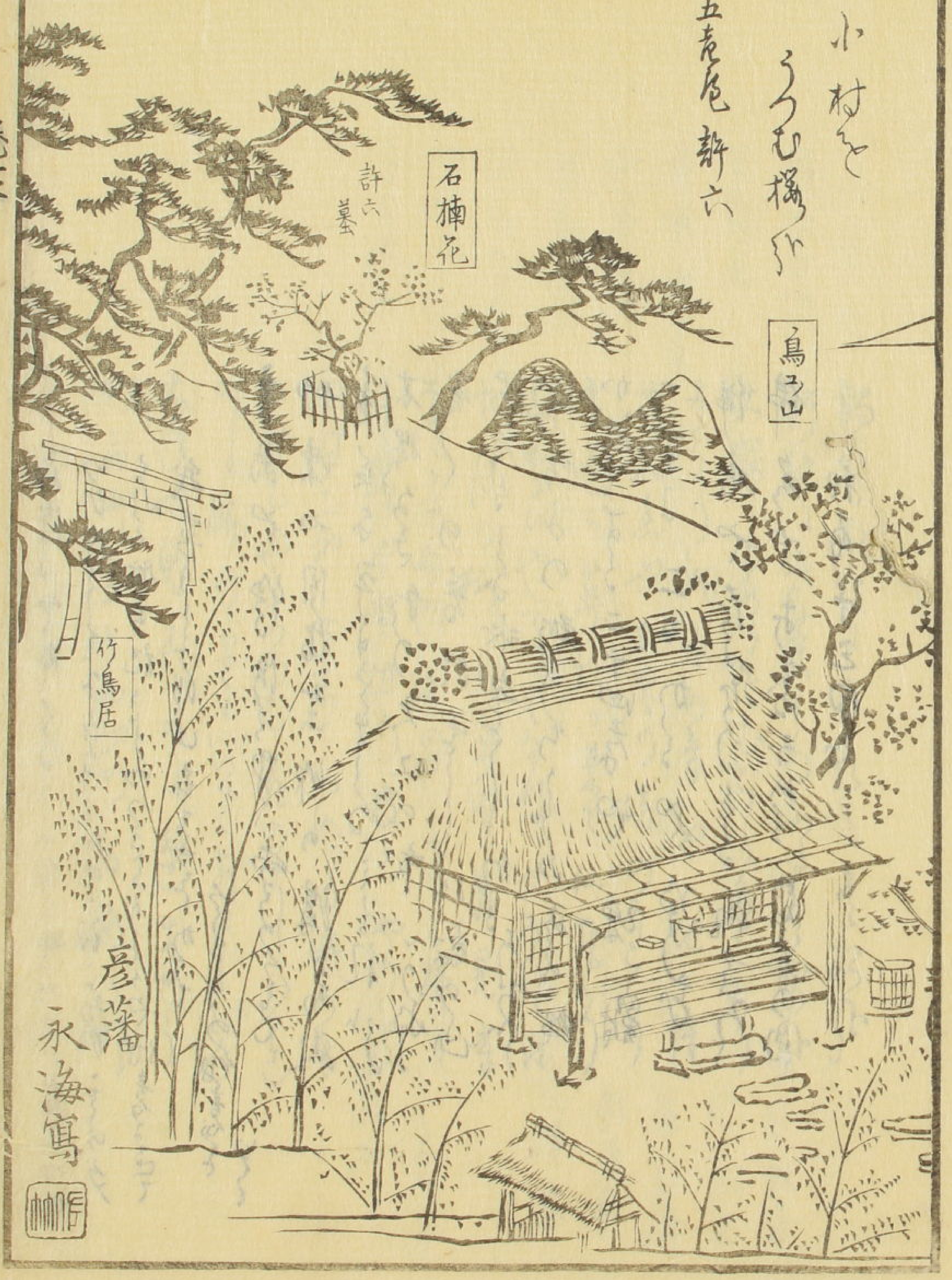
五老井真寫

菊阿全集

城南ニ東村といふ小里あり此地ニ五老井あり民家のつくり至お風流の広くさうさうし田舎めかしき地也



小村をうつむ櫻かな
五老庵許六



歌侍る雲井なるらん中々峰の上は定家卿の
いひ捨られたる下らすしおのれ恥しやこの夕
くれ紀書紀によみつきたりとや仏意にて
我宗にとりて此言をかりて　今さらの仏意をいふ

高島や湖にも雪のひとし
神凍や円満業卿の濁られ
まだ冬子見すくさぬ三井寺
本堂なき野の大江の音この山
岩くの音絶へし比叡の山
流れ行く氷のもとし打あらふ
綿帽子の郷のちらしや冬の蜆
かへりする二十四孝や凍鮒
一本よ二日からや陣
侍衆やたまなつくる紙さへ
佛名やおもひおさめる物見の間
祖翁十三回忌

鍋かけの後に聞えて冬ぬ行
行燈に水菜ならぬ冬ぬ行
大根でとめてむらし冬ごもり
冬こもり湖水の音や地侍
椿木や木草の境のふゆこもり
まだ芭蕉葬礼に来て仕舞ひ
節季候やするがたりてやかにけ
十月の梅の天気や清見寺
落とる両門跡のすゝ払
すゝ払や宰相の殿のやり衣
かけ乞や冬なくていのつる鐘の音
かけ乞や家つむ花のとしのくれ
の鐘のよるいさ誘へてもらへん
大つごもりや鬼王とのよ筆ゆもせよ
町家卿立ち切の日数かな
題山家鐘つき

のちまでも延しかけたる程一の部
餅つきや下戸三代のゆつり臼
針口は汲わりしらうのくさ
江戸から江戸へ来るとしもなし
連歌師の子はさやまんたの春

先ニあつめる四時の吟から五老井の吟まで彦根高橋氏
湖杉子が花書して諸集よりぬき出しるを是まで
同志のかたにおくる也 其集名を志るす

彦根餅　それ庵　七句集　入日記　玉かつら　韻塞
公平日記　まくら　有磯海　宇陀法師　柿表紙
壺渡卑　草苅笛　東西扇　篇突　南行記
万句集　帰花　誹千句　葉人形　青むしろ　浅生
浮世の北　浮かる　横平樂　拾訂狂　麻生　春のみ　猩々

猿蓑　続さるみの　冬の日　別生鋪　続別ざまま　枕かけ
旅袋　芭蕉の実　喪の名残　それ婦　笈日記　射水川
直指傳　句兄弟　東海道　菊の香　小太郎　笈の若葉
俳諧傳　炭俵　田作問答　西花集　小文庫　白陀羅尼
雪月花　小弓　山中集　形見の題　草の道　山琴集
続十三歌仙　枯尾花　霜の光　冬の花　梅の嵯峨

五老井子遊ニ
草咲のほとりてさくらのかけさうつる
青柳やかきしをれた秋の月
去草

風俗文選大註解巻之壹上尾

藤井蔵板